

No. 14

ニチメン東京社友会

E-mail menkwa@sojitz.com

【目 次】

1. 2013年度社友会総会・懇親会開催通知	2	
2. 2013年度賀詞交歓会開催報告		
① 会長挨拶	会長 河西 良治	3
② 来賓挨拶	双日(株)代表取締役社長 佐藤 洋二	4
③ 賀詞交歓会報告	世話人 花澤 和郎	5
④ 出席者名簿		8
3. 会員動向		
① 新規加入者		9
② 会員名簿訂正		9
③ 年会費入金情報とお願い		9
④ 訃報		11
4. OB会・同好会ニュース		
① 第一回ニチメン・シカゴ会	五月 女穰	12
② ニチメン東西合同さんさん会	埴生 榮勇	14
③ 日綿OS・MCS・OB会	林 義人	16
④ いろは句会	宇治田 薫	17
⑤ 大阪社友会ニュース	林 靖	18
*訂正と御詫び		18
5. 会員寄稿文		
① タタ(TATA)に見る異文化理解	浜地 道雄	19
② インド雑感ー(3)ー中印関係と南アジア	高尾 勝	21
③ ベトナムの今	山邑 陽一	23
④ ミャンマー駐在記	丸野 純	25
⑤ イギリス徒然	柴田 隆	28
⑥ 書評2編	渋谷 義	29
⑦ ゲーテと本居宣長のこと	竹内 可能	31
⑧ 「みちのく探訪」の旅	高木 亨一	33
6. 追悼文		
加藤信一郎さんの思い出	辻井 準一	35
7. 社友会役員・世話人一覧表ならびに連絡先		37
8. 双日(株)社友会関係窓口		37
9. HP立ち上げ当初を振り返って・・・	栗田 久彌	38
10. 編集後記		40

2013年度 ニチメン東京社友会総会・懇親会開催のお知らせ

恒例の社友会総会・懇親会を下記の要領で開催します。総会の主な議題は役員改選、事業報告などですが、総会後の懇親会ではお集まり頂いた方々で楽しく歓談のひとときをお過ごし願えればと思います。お誘い合わせの上、多数の皆様のご参加をお待ちしています。

開 催 日 ; 2013年 7 月 11 日(木) 12:00 ~ 14:00 (開場 11:30)

会 場 ; 「如水会館 2 階 “スターホール”」

(昨年と同じ場所です。クロークは 1 階にあります)

千代田区一橋 2 - 1 - 1 TEL. 03-3261-1101

アクセス ; 地下鉄東西線の竹橋駅下車 1b 出口より徒歩約 4 分。

または都営三田線、都営新宿線、半蔵門線の神保町駅下車 A 9 出口より約 4 分。

(白山通りの反対側に出ますが、エレベーターがあります。)

当日会費 ; 2,000 円、(尚、年会費 3,000 円お支払の場合は合計 5,000 円)

出欠の確認 ; 準備の都合上、**6 月 30 日必着**で、会報に同封の返信用ハガキにて出欠の可否をお知らせ下さい。

(後日出欠予定に変更があった場合は世話人の誰かに速やかにご連絡下さい。)

そ の 他 ; 当日は気軽な服装でお出かけ下さい。

ニチメン東京社友会 事務局
(E-mail : menkwa@sojitz.com)



2013年新年賀詞交歓会における会長挨拶

会 長 河 西 良 治



皆様、明けましておめでとうございます。

この寒さにも拘わらず、多くの懐かしいニチメンOBの皆様がご参集頂きて、心より厚く御礼申し上げます。

また、新年のご多忙の折りにも拘わらず、双日よりは佐藤社長以下役員の皆様がご列席下さいまして、感謝の極みでございます。

まずは、私共の心の故里である双日がこの内幸町という超一流地の立派な新ビルにご転居なさいましたことを、茲にあらためて心よりお慶び申し上げたいと存じます。

ご列席の皆様はニチメン社友会も新年で7年目を迎える次第でございますが、双日にはこの素晴らしい会場のご提供を始め、毎年貴重な支援金のご援助を戴いておりますことに対しまして、茲にあらためて厚く御礼申し上げる次第でございます。

今回は、7年前の発足時より倉又代表以下14名の世話人の皆様、メンバーチェンジも殆どなしに、その運営に絶え間なく頑張ってくれていることを皆様に先ず御報告申し上げたいと存じます。

さて、世界の経済情勢はリーマンショック後の停滞が長引いており、我が国も円高の調整とデフレ脱却という重要な課題に直面しております。

私は、今や大きく開放された新世界にあって我が国はもっともっと開かれた国であるべきだと、常に思っております。

この度、圧倒的なポジティブ・サプライズによる安倍新政権の発足に伴い、先ずは米国、欧州各国、そして中国、アジアの主要国と、もっと胸襟を開いて語り合い、共存共栄の理念を共にして政治レベルで信頼関係を築く努力をすべきだと思います。

通商政策上では、我が国の潜在成長力を向上させるために構造改革と規制緩和は必須条件でありまして、TPPなどを積極的に活用して、国外の活力を取り込む自由化が必要であると存じます。

アベノミックスの新政権には、これを機に日本経済を根っこから立て直す成長戦略の樹立が急務であると存じます。

残念ながら世界的に不安定な経済情勢のもと、双日は2013年3月期通期の経常利益を320億円、純利益を100億円と、このたび下方修正なさいましたが、同業他社も同様のシチュエーションでありましょう。

何れに致しましても、この素晴らしい新社屋への移転後の記念すべき初新年を迎えるに当たり、全社を挙げて打って一丸となり大発展を遂げられますよう、祈念申し上げます。

正にグローバル化の真只中にあるこの地球上での総合商社・双日の前途は洋々たるものがあることは疑う余地はありません。

それでは、佐藤社長以下、役員社員の皆様様の益々のご活躍と、ご出席の社友会会員の皆さまのご健勝を祈念申し上げて、新年のご挨拶とさせていただきます。

どうも有難うございました。

(それから、500円を一寸こう入れて頂ければ有難いと存じますので、皆様どうぞご協力下さい。ありがとうございました。)

2013年新年賀詞交歓会における来賓ご挨拶

双日(株)代表取締役社長 佐藤 洋 二



只今ご紹介にあずかりました双日株式会社の社長、佐藤洋二でございます。

皆様、明けましておめでとうございます。

只今、河西会長より色々なご期待を含めて双日に対する今後の姿などについてお話を頂き、若干過分に思う次第ですが、ご存知のように昨年12月26日の安倍内閣の誕生以降、マーケットを含めて明るい兆しが見えてきている、というのも事実でございます。これから実体経済に対して政府がどのような手を打っていくのかが、今後の課題であることは言を俟たないわけですが、必ずや有効な手を打って頂けるものと信じて、民間は民間でやるべきことをやる、ということが我々に今一番課されているところかと思えます。

さて、昨年2012年ですが、さきほど河西会長よりもお話しがありましたように、大変苦しんだ一年間ございました。特に円高、それから市況の悪化、更に欧州の財務問題に端を発した中国景気の減退などが、私共を牽引してきたエネルギー・金属資源部隊の収益力を殺ぐということになりました。その結果、通期の業績見通しの下方修正ということになってしまったのも事実でございます。他方、最近の状況について申し上げますと、米国の景気に対する見通し・展望として、シェールガスの開発や失業率の低下など、どちらかというとも明るい話題・ニュースが入ってきております。こういった米国の景気回復、今後の活力が期待されている状況ですが、現在、世界の市場に大きな影響を与える国が米国と中国ということから、この内一つの米国の景気が上向いているということは、日本の経済にも必ずやプラスをもたらすことになると思いますので、我社にとっても良い環境が整いつつあると考えて良いのではないかと考えております。

このような環境の中に、私共が2012年度に掲げました“Change for Challenge 2014”という新しい中期経営計画がございます。我々がこれから挑戦してゆくために必要な変革を自ら行っていこうではないか、という思いを込めて計画に副題を付けました。

この中期経営計画の初年度は、先程申し上げましたように減益の中での苦しいスタートを切ったわけですが、2013年とは言いますと、今述べましたような環境の変化の中で、今年の干支である癸巳（みづのと・み）の意味するところ、新生脱皮をする、飛躍のために生まれ変わることが可能な年ということで、我々の“Change for Challenge”という新しい中期経営計画を推し進める上で、正に相応しい年になるのではないかと、というふうに期待をしている次第でございます。

色々な見方があると思いますが、我々はこの“Change for Challenge”の結果を一つずつ出していく中で、皆様にご心配をかけております現在の株価水準の引き上げ、そして配当性向を更に引き上げていくための体力の回復など、そういったことを実現できる会社に行きたいと考えております。この3年間、何としてもこの中期経営計画をやり遂げて、今申し上げたことを皆さんにご提供できるような会社にしてゆきたいと考えております。

役職員一同、一丸となり、何とかそのような明るく楽しい情報を皆様の方にお流しできるように、これから頑張って参りますので、引き続きのご支援を賜りたいと思います。

これからも、私の方から色々なところでお話をする機会がございましょうし、そういった場で社長としてのメッセージを発信してゆきたいと考えております。この場では詳細はご紹介致しませんが、夫々の成長セ

最後になりましたが、ニチメン東京社友会の益々のご発展と、本日ご列席の皆様のご健勝を祈念致しまして、私のご挨拶とさせて頂きたいと存じます。ご静聴ありがとうございました。



倉又則夫代表世話人

2013年新年賀詞交歓会 懇親会風景



左より総合司会 塚本幸雄世話人、右へ、西村照男世話人、
小堀裕子 司会アシスタント





“乾杯！” 島崎京一副会長



2013年1月17日開催 賀詞交歓会出席者一覧

(敬称略)

ア 青 木 正 和
浅 井 正 彦
朝 倉 重 道
東 倉 信 子
甘 利 武 廣
荒 崎 盛 雄
新 田 照 晨
池 田 照 格
池 田 永 幸
池 永 浩
石 川 博 保
泉 澤 伸 夫
石 原 謙 一
石 藤 安 清
伊 藤 正 雄
井 村 隆 従
今 居 宏 夫
岩 田 英 一
岩 北 克 昭
大 久 保 利
大 塚 海 生
大 西 子
大 野 勇
大 野 良
大 野 生
大 平 雄
大 森 作
大 山 弘 雄
大 田 隆 彦
大 村 睦 夫
奥 小 野 次
小 野 稔
小 野 稔
河 西 夫
河 西 治
金 田 博
鎬 木 昭
亀 田 勲
川 西 已
川 畑 三
菊 池 省
木 津 奈
喜 多 雄
木 村 次
金 城 弘

ク 倉 又 則 夫
倉 持 次 雄
栗 田 久 彌
小 西 重 勝
小 林 靖 幸
五 島 慎 二
斎 富 造
三 枝 藤 伸
斎 五月 弘
五 月 女 穰
坂 井 良 司
坂 本 潤 一
桜 井 俊 郎
佐 々 木 弘
笹 原 次
佐 藤 統 真
佐 藤 真 克
三分 塚 美
シ 篠 柴 田 実
柴 洪 谷 義
島 白 崎 京
ス 杉 浦 哲
杉 本 好
陶 山 佳
曾 我 宏
園 山 春
大 工 原 正
高 尾 亨
高 木 恒
高 瀬 允
高 田 秀
高 野 泰
竹 内 可
塚 本 幸
津 根 賢
ト 利 間 政
豊 中 尾 舜
ナ 中 尾 弘
中 川 十
中 谷 宣

中 原 正 紀
名 島 憲 一 郎
滑 川 和 子
成 見 和 男
南 部 郎
二 西 川 周
西 村 男
西 村 昭
西 村 照
庭 野 松
ハ 橋 口 喜
橋 爪 昭
羽 島 川
長 谷 洋
花 澤 和 郎
埴 生 榮
浜 口 信
ヒ 平 石 義
久 本 紘
広 岡 幹 雄
フ 深 田 孝
福 富 直 明
古 家 章
ホ 星 合 良 彦
マ 本 間 登 志
牧 洋 生
榊 渥 夫
榊 山 次
松 尾 一
松 田 哲
三 本 夫
三 浦 藏
水 嶋 夫
溝 野 幸
宮 江 三
宮 浦 博
村 本 博
望 井 武
ム 森 月 德
モ 矢 江 健
ヤ 矢 島 孝
吹 敦 司

山 岸 正 雄
山 邑 陽 一
山 本 浩 郎
三 吉 海 秀 造
吉 川 秀 夫
吉 川 浩
吉 木 健
吉 本 邦 晴
ワ 渡 辺 重 幸

[双日役員等ご来賓]

土 橋 昭 夫
原 藤 洋 大
佐 茂 木 良 二
此 田 井 哲 夫
花 田 中 正 志
西 村 昌 勤
丸 田 秀
塚 青 木 尚
平 井 聡 弥
伊 地 知 俊 一 *

[支援協力者(非会員)]

今 井 恵 子
小 堀 裕 子
増 川 恵 子
六 反 真 智子

合計 158 名

*印 = 運営に協力頂いた会員。
(非) = 非会員。入会予定者。

お願い：

2012年度会費を未納付の方は当年度中の納付に協力下さい。

2011年度分未納者は大至急2012年度分と合わせ納付頂きますようお願いします。

当会会則第11条の規定により2期分の会費未納者は会員資格喪失となります。

振込先は、下記いずれかを利用して下さい。(振込手数料は各自ご負担願います。)

1) 郵貯銀行

口座番号：00100 - 4 - 318041

口座名義：ニチメン東京社友会

2) 三菱東京UFJ銀行東京営業部

普通口座

口座番号：8225155

口座名義：ニチメン東京社友会 代表 倉又則夫

振込に際しましては、振込者名欄にご自身の名前を最初に左詰めに記載願います。

(ネンカイヒ、ニチメン、XXネンドカイヒ等の記載があると振込者名が通帳に記載されず、振込者が特定できません。)

(註1) 長寿会員は年会費免除になっておりますが、長寿会員からご送金を頂いた場合は当会へのご寄付とみなし処理させていただきます。(会運営上大変助かります)

但し、何らかの手違い等であれば事務所までご連絡下さい。

(註2) 長寿者氏名：(50音順敬称略)：

相原淑、石川勝美、井本公一、岩居宏一、大野久生、大村譲、柿本寅之助、河西郁夫、門松孝、上条達雄、北村俊夫、国領和彦、近藤貞一、佐藤信世、椎木与志也、鈴木明、鈴木邦治、南部晴雄、西尾敬一、西田啓一、藤田一郎、古川熙、松田好生、宮田信雄、望月昌徳、諸橋良吉、山口富治、山口富美子、山口良孝

以上 29名

(註3) 2013年度(2013.7～2014.6) 年会費納入済会員 (50音順敬称略)：

青木繁行、青木浩、赤澤宏哉、浅子豊治、新井清治、新井康友、蟻本守夫、石原清、井田龍夫、伊藤尚志、岩田功、宇津木長、海野敏夫、大谷毅丈夫、奥田哲、勝井嗣雄、鎗木順治郎、亀田昭、川畑勝四郎、河本吉人、木内純一、木村敬男、京野勉、久芳成、島崎京一、島田俊彦、下浦通洋、白坂泰之、新藤孝、菅沼利太郎、杉浦好治、高尾勝、竹内可能、田所忠彦、塚田尚、土屋秀雄、土井安之、中谷勝、中村昌義、西川周、西田昇、西野幸夫、平井出良彦、福井芳樹、藤井正之助、藤井宏憲、細谷和夫、堀江亘、堀部義数、前田孝、松坂茂、松崎利夫、三嶋敏夫、宮田信雄、村尾毅、八津道夫、山田博一、吉田敬三、吉弘ちよ、渡辺一郎

以上 60名

訃 報

(平成24年12月1日～25年5月31日)

ニチメン東京社友会

氏 名	出身部門	ご逝去年月日	享 年
※高 田 有 喜	機 械	2012年 8月17日	81歳
松 本 理 則	木 材	2012年12月18日	78歳
※森 田 清 市	機 械	2012年12月29日	74歳
山 木 重 貞	財 経	2012年12月29日	90歳
小 野 寛	化 工	2013年 1月12日	78歳
田 中 久 彦	機 械	2013年 2月15日	79歳
※柳 田 望	機 械	2013年 4月 3日	81歳
田 中 清	食 料	2013年 4月 4日	85歳
加 藤 信一郎	機 械	2013年 4月 6日	90歳
平 岩 勇	業 務	2013年 4月21日	82歳
高 野 泰 雄	鉄 鋼	2013年 4月22日	74歳
※藤 井 学	業 務	2013年 4月29日	79歳
※鈴 木 松 男	木 材	2013年 5月20日	78歳
矢 吹 敦 司	機械・建設	2013年 5月22日	85歳
※斉 藤 寿 一	電子電気	2013年 6月 1日	68歳

ニチメン大阪社友会

氏 名	出身部門	ご逝去年月日	享 年
鴻 野 光 男	鉄 鋼	2012年11月22日	90歳
朝比奈 茂 夫	業 務	2012年12月 2日	85歳
吉 田 富士子	静岡支店	2012年12月20日	83歳
玉 田 友 英	棉 花	2012年12月23日	78歳
門 田 徳 樹	名 古 屋	2012年12月26日	90歳
※古 澤 虎 吾	織 維	2012年12月27日	75歳
前 田 靖 枝	福岡支店	2013年 1月21日	80歳
河 田 功	総 務	2013年 1月24日	98歳
島 谷 寛	綿 花	2013年 4月 2日	84歳
日 比 宣 夫	織 維	2013年 4月18日	80歳
塩 哲 夫	織 維	2013年 5月 9日	71歳
浅 井 吉 彦	織 維	2013年 5月19日	86歳

※ 非会員

ご冥福を、お祈りいたします。合掌

第1回ニチメン・シカゴ会開催

五月女 穰

風薫る大安吉日5月11日に結婚式で賑う東京青山の青学会館で、第1回ニチメン・シカゴ会が開催されました。

米国ニチメン・シカゴ支店は、1960年に設立され、2003年に43年に亘る役目を終え閉鎖されましたが、その間シカゴ及びシカゴ支店の管轄の米国、カナダ各地の出張所に判明しているだけで合計103名のニチメン社員が駐在しました。

今迄シカゴ支店開設時の土橋支店長、丸山支店長を中心とした集まりや、その後の坂上支店長、米田支店長時代等、それぞれその時代に駐在していた人達による言わば横の親睦会は何回か開催されましたが、ニチメン・シカゴ支店が存続した43年間の何れかの時期に駐在していた人達を網羅した世代を超えた縦の集まりはありませんでした。

昨年10月開催の機友会に関西から出席された田中さん、米田さんを中心に、この43年の全期間に亘り駐在した人達が一堂に会し、ミシガン湖畔のシカゴで夏の猛暑、極寒の冬に耐え、苦楽を共にした仲間が大いに語り、親睦を深め、そして多少大げさに言うならこれからの人生の糧にしようとの話が持ち上がり、約半年間の準備期間を経て今回のニチメン・シカゴ会の開催まで漕ぎつけることが出来ました。

上記の103名のうち、13名の方が既に鬼籍に入られているので、残りの90名にシカゴ支店が何かにつけお世話になった元ニューヨーク駐在の朝倉さん、吉本さん、更に特別ゲストとしてシカゴ支店創業時にご支援を頂いた岩村さん（元東洋通信）、川村さん（元フォスター電機）を加えた合計94名の方に案内状を発送し、最終的に46名の方が出席されました。遠路遥々関西からは辻井さん、田中さん、米田さん、渡辺さん、そして吉本さん、又名古屋から竹本さん、松井さん、高岡さんが出席されました。今回現役の若い人達（と言っても50～60歳ですが）にも積極的に出席を呼びかけた結果、出席者の半数以上が戦後生まれ、最年少は昭和61年ニチメン入社で、比較的平均年齢が低いOB会となりました。

会は先ず2月15日に逝去された田中久彦さんを含む13人の物故者に対する黙祷に始まり、次に発起人の1人である田中さんよりニチメン・シカゴ会設立に至った経緯の説明、発起人を代表して丸山さんによるご挨拶と続きました。

丸山さんからは、ゼロから商売をクリエイトしなければならなかったご苦労、初成約出来たときの喜び等シカゴ支店創業時の思い出話をお話頂きました。

その後辻井さんによる乾杯の音頭と続きましたが、何時もの事ながら軽妙洒脱な語り口には感心させられます。

しばし歓談の時間を挟み、各部門を代表して経理の三分一さん、鉄鋼の岩田さん、電機の杉本さん、機械の竹本さん、創業時の亀田さん、又特別ゲストのお二人にも話をして頂き、最後に今回の最年少出席者である昭和61年入社の藤久保さん、松尾さんにも登壇願ひ閉鎖直前のシカゴ支店の状況を話して貰いました。

会場の各所で、文字通り20年、30年振りの再会を喜ぶ姿が見られ、又年齢差を超えての話も弾んだようで時間が経つのも忘れるほどでした。最後に小幡さんによる中締め、その後私が総括、次回の案内を行い会は無事終了致しました。

次回は来年5月開催を予定しておりますが、シカゴ店内に事務所を置いたメーカーの駐在員をも含める等出席者の輪を広げて行くことも今後の課題として検討して行く所存です。

開催迄に多くの方のご協力を得ましたが、とりわけ私を除く若手の世話人が、何れも現役で多忙な身でありながら、最も難しい作業であった名簿の作成、出欠の確認、会場の設営・写真撮影を含む当日の会の進行

等で大活躍をして頂き大変感謝しております。彼らの活躍が無ければ、このような各年代を網羅したOB会の開催は不可能だったでしょう。

最後になりますが、今回のシカゴ会の発起人、世話人及び出席者を下記します。(敬称略)

発起人：丸山修作、辻井準一、三分一克美、杉本佳久、山本大吉郎、竹本史生、田中長典、米田信一、永田堅志郎、西尾俊明、平床幸次、小幡和徳

世話人：五月女穰、保科孝、藤井敬三、砂子和久、平嶋成晃



前列左より 杉本佳久、岩田英昭、亀田昭、辻井準一、丸山修作、三分一克美、吉本邦晴、田中長典
2列目左より 高岡峰雄、西尾俊明、永田堅志郎、広内卓生、広本昌也、岩村久雄（東洋通信）、川村史郎（フォスター電機）、山本大吉郎、小幡和徳
3列目左より 北野廣道、小蒲智臣、福本匡純、渡辺康、米田信一、竹本史生、松井靖治、名島憲一郎



前列左より 石川竜司、五月女穰、浅利真司、金井湧二、朝倉重道、木下龍三、松井靖治、藤井敬三
2列目左より 松尾健、市岡知良、大島教義、浦野由紀夫、山内直之、岩本真二、仁平則行、保科孝
3列目左より 清水昇市、鈴木祐二、藤久保俊三、砂子和久、嘉瀬正彦、平嶋成晃、高野昭彦

ニチメン東西合同さんさん会

埴 生 榮 勇

新聞TV報道によると、大阪の街は大変貌をとげ、まさに“桑田の変じて滄海となる”ほどの都市のメタモルフォーゼと言えます。

大阪は、この日、集まった12名全員が“分銅マーク”を胸にニチメン・マンとしてスタートした思い出の土地であります。

その懐かしい大阪駅も阪急梅田周辺も昔の面影が薄れたようです。

東京の街々も同様に大変貌です。ニチメン入社から既に55年。

今回は何十年ぶりの邂逅の人も居りますが、変わらないのは人心であります。

2012年12月7日（金）12時から「北海道八重洲店」に京阪神から参加の4人を、首都圏在住の8人が迎えて、昭和33年（1958年）同期入社の会が4年ぶりに開かれました。第1回を2008年11月28日に館山寺温泉遠鉄ホテル「エンパイア」で開催して以来、アンコールの声は時折聞こえていましたが、昨年の1月に太閤園で開かれた「ニチメン大阪社友会」の新年賀詞交歓会で、喜寿や傘寿などが目前に迫った同期の桜から2度目の「東西合同さんさん会」を開こうとの強い要望があると聞きました。

開催候補地は大阪、宝塚、京都、名古屋、横浜、東京など関東側に一任するとのことで話が現実味を帯びてきました。そのうちに関西在住者の中にも、子息や令嬢が首都圏内に居を構えたり嫁いだりしており、孫子や親友等にも逢いたいという人があることが分かってきました。近年観光地として東京からの観光客も急増している横浜を第一候補とし、時期は11月末か12月初旬の忘年会シーズン前として9月頃からマスタープランの作成に着手しました。

関西在住の皆さんも東京はよくご存知だろうと想定して、横浜の中華街で会食後、ランドマークタワーを中心に広がる「みなとみらい」、山下公園、大栈橋、港がみえる丘公園、外人墓地、遊覧ボートによる横浜港見物などを考慮しながら、肝心の日程を11月30日又は12月7日（いずれも金曜日）のいずれにしようかという時になって、そのどちらになっても参加できなくなる御仁が関西在住者にあることが分かり、やむをえず松尾君に相談の上、該当者に多数決で決定をお願いすることになりました。その結果は12月7日実施に決まり、それぞれ学友との忘年会の幹事役を引き受けていた、津田忠佑、廣岡松治郎の両君（いずれも第1回にも参加）は心ならずも欠席を余儀なくされました。この場を借りて深くお詫びいたします。

一方で、昨年5月に開業した東京スカイツリーの人気は全国的にも抜群らしく、松田邦夫君の機転により、12月7日16時からの展望デッキのWebチケット8枚の予約に成功したとの連絡があり、関東勢は「灯台下暗し」を恥じつつ、流れは東京駅―会食―東京スカイツリーへと傾きました。誠にお気の毒ながら12月1日松田君の令夫人が急逝されたため、皆が再会を楽しみにしていた松田君の上京は叶わないものとなりました。

当日の12月7日は好天に恵まれて霊峰富士山の眺望を楽しんだ、神田久大、菊澤淳、松尾哲雄の3君が新幹線から定刻に降りてきたのを、先着していた田淵弘通君と八重洲口で出迎え、そこから徒歩5分の会場「北海道」へ案内しました。首都圏から加わったのは阿賀信夫、大谷毅丈夫、大場禎治、杉本佳久、田村陽一、長谷川洋、花崎俊雄の7君と筆者の総勢12人でした。この会の開催に真っ先に賛同し万難を排して出席したいと楽しみにしていた岩下恒則君はこの日が待てずに11月24日に逝去、菊池省三君は法事のため、また鎌田亮三君は体調を崩し緊急入院のため欠席の止むなきにいたりしました。

開宴に先立ち、8月16日に亡くなった堀之内敏君及び前述の岩下君と松田君令夫人に黙祷を捧げました。皆さんは飲み食いよりも、積もる話に夢中でした。一段落後一人3分間の持ち時間で順に話すことにしましたが、趣味、健康、持病、愛妻、再婚願望、家族、海外経験等々について各人とも話が制限時間を超えて際限なく続くので、3時間を予定した昼食会は酔いが回らないうちに時間となりました。最後に店の玄関で記念写真を撮影し、東京スカイツリー見物の7人以外は名残を惜しみつつ解散となりました。

「北海道」から宝町駅まで5分ほど歩き、地下鉄で押上駅（スカイツリータウン）までの所要時間は約15分。16時前にスカイツリー4階のWebチケット発券カウンターに着くと既に行列が出来ておりましたが、程なく展望デッキ行のエレベーターに乗れました。350メートルの降り口は西向きで、日没と富士山を見ようとする人々が様々なカメラを持って3重4重に窓際に集って来ていました。我々もまさに沈まんとする夕日の右手にくっきりと浮かぶ富士山のシルエットの美しさを人垣の後ろから愛でることができたのは誠に幸運でした。

下りのエレベーターでは混雑と年のせいか3グループにはぐれてしまいましたが、その直後に地震があり、電車の運転停止やそれに続く運行の乱れによる混雑が、ラッシュアワーで増幅され、皆さん帰路は大変苦労されたことでした。菊沢君だけは日帰り参加で、10月開催の「機友会」にも出席という、付き合いの良さと強靱な体力に頭が下がりました。

翌日の12月8日は高尾山登山の宿願を果たす松尾君に大場君と筆者が同行しましたが、シェルパ役を期待された私は無残にも途中でリタイアして、足軽で身体強健な両君に舌を巻くばかりでした。また東京の下町探訪をしたという神田君の願望を容れて、大谷君が柴又地区から浅草方面を案内して楽しく無事に役目を果たしました。

我々が昭和33年に入社後程なく完成したニチメン宝塚独身寮の寮生を中心に、当時仕事の面でも関係が深かった人々の間で自然発生的に生まれたこの私的な同期会ですが、早くも、次回はニチメン発祥の地大阪で開催しようとの声が挙がっております。



前列（左から）、花崎俊雄、阿賀信夫、長谷川洋、埴生榮勇、田淵弘通、大場禎治
後列（左から）、松尾哲雄、田村陽一、大谷毅丈夫、神田久大（剛太郎）、菊澤淳、杉本佳久。

日綿大阪産業機械課(OS・MCS)OB会

林 義 人

まさに梅雨入りの去る5月29日、大阪産機OB会の10名のつわものが、関西と東京から熱海伊豆山に集まった。50音順に、泉伸夫、漆崎隆司、大平栗雄、鍵本孝三、川西勲、澤田太郎、須佐和夫、辻井準一、長谷川洋、林義人の、いずれも70歳以上のおじいさんたちだ。辻井さん、澤田さんという大先輩と、最年少組の年齢差は実に18才、とは云いながら、嘗て濃密な人間関係をバックに、同じ旗を背負って世界中で働いた、そして今では共通のふるさとを懐かしむ仲間—と云っては大先輩に悪いかな?—である。

夕刻の会食の時から、部屋に戻って深夜にいたるまで、談論は酒とともにとどまるところを知らず、よくも喋り込んだものだ。3回目となると段々と思い出すのか、「へえ、ほんまかいな。聞いたことないで」といった「取っとき」のはなしも両大先輩は云うに及ばず、案外若手の面々から殊の他多く出た。記憶力や表現力は加齢に反比例するものだと感心した。

今回は、片井邦男、小橋雅寛、広本昌也、本田務の諸兄が参加できなくて残念だった。

最後に、今回も細やかな配慮をもって世話人をつとめられた川西さんと、会場の伊豆山「ハートピア熱海」の設営などで、彼に協力された長谷川さんに感謝の意を表します。



前列左より； 鍵本孝三、林 義人、澤田太郎、辻井準一、長谷川洋
後列左より； 須佐和夫、漆崎隆司、泉 伸夫、川西 勲、大平栗雄。

俳句の会「いろは句会」

宇 治 田 薫



I. 句会のその後：

去る2月2日、故太田昭主宰の一周忌を迎えた。一ヶ月遅れ乍ら、月命日の3月2日、会員一同揃って横浜の墓地に出向き、ご仏前にて永年に渡る俳句のご指導を感謝し、ご冥福をお祈りするとともに、この一年の句会状況をご報告しつつ合掌した。参詣後、昼食を共にして、ご指導頂いた約23年間の故人を偲び、散会した。

例により、前号以降の作品の中から各会員2句宛、下記にご披露致します。

I. 一同の追悼句（アイウエオ順）：

友禅の流れに光る寒の水 百年の瓦礫を後に鳥帰る	宇治田 薫
小春日の腰の伸びたる老夫婦 宿坊に読経の朝や寒の水	太田 琢也
カレンダー残る一枚年惜しむ 沢下り水面にうかぶ藪椿	久保田悦子
起き抜けの身に芯とほす寒の水 ケーキ箱揺らさぬやうに春の坂	三枝 一希
朝市や策に葉付きの冬至柚子 焼葱の芯に舌焼き独り酒	笹原 弘
初富士や一の文字引く雲ひとつ 耕せば土の動きの息吹かな	下川 泰子
息災を椀にたっぷり七日粥 ものの芽の力をためて時を待つ	須藤 忠昭
春浅し雲の流れは整はず 春日傘集まり散りぬ交差点	塚本 幸雄
一つだけ胸に寄り来る柚子湯かな 初蝶は風の高さにさまよへり	福島 有恒
寒の水白寿の母と戴けり 風あつめ風にあそびて糸桜	藤野 徳子
湯豆腐や話納まり角まるむ 泣き虫が涙見せずに卒園す	若月 義和

以 上

nmosnmos 大阪社友会ニュース nmosnmos

平成25年新年互礼会

林 靖

ニチメン大阪社友会平成25年新年互礼会は1月10日（木）、大阪城公園北詰にある藤田観光・太閤園で開催されました。

当会場は、昔懐かしい日綿実業園遊会を楽しんだ場所であり、足回りも良いので会員諸兄姉にも好評であり、本年度も引き続いての開催となりました。

元旦以来の好天に恵まれ、過去最高の192名の参加となりました。今回で6回目の新年互礼会ですが、年々参加者が増える傾向にあり誠に喜ばしいことであります。

午前11時定刻、関岡大吉世話人代表が開会宣言を行いました。

年頭挨拶は田淵弘通会長の病氣辞任に伴い、林 靖副会長が会長代行挨拶を行いました。（互礼会終了後、臨時世話人会議を開催し、林 靖新会長就任を決議しました。）

続いて、恒例のセレモニーとして25年1月1日現在において、米寿を迎えられた11名の方々の表彰式を行いました。

表彰者を代表して、田中義巳さんがお元気に答礼挨拶をされました。

引き続いて、年始の大変お忙しい中わざわざ東京から駆けつけていただいた代表取締役副会長原 大様以下役員幹部を代表して、代表取締役専務執行役員茂木良夫様から年頭のご挨拶を頂きました。

乾杯音頭は原 榮さんをお願いしました。会場は一気に盛り上がり、一斉にビールを乾杯した後は皆さん待ってましたとばかりに旺盛な食欲を発揮されました。

会場いっぱいに旧交を温めるうちにあっという間の3時間が過ぎ、13時30分に藤崎恭典副会長の音頭で一本メを行いお開きとなりました。

記念撮影は引き続いて木村幸史副会長、井上行芳世話人、尾子 明世話人、村松正司世話人が担当し、会場内をあちらこちらと大奮闘しました。

退場される皆さんが口々に楽しかったと言われ、次回を楽しみにしているとのことで世話人一同お世話のやりがいを感じた次第です。



訂正と御詫び

前号P-33-の「機友会」出席者リストより下記の8名が、印刷会社のテクニカル・エラーで脱落していましたので、御詫びし、下記に印します。

木皿重正、田中久彦、藤井敬三、山本正巳、菊澤淳、田中長典、福富直明、山岸正雄

タタ(TATA)に見る異文化理解 ～ 時空を超えた魅力

浜 地 道 雄



The Economist 12月1日号
Ratan Tata



松本清張「ペレスポリスから飛鳥へ」「火の路」



筆 者

The Economistは英国ベースの、世界でもっとも重要な政治経済紙（週刊）の一つと見なされている。その表紙をはじめ Wits（知力）に富む記事は魅力的であり示唆的だ。

（一例：Jobsの本）

http://www.eigokyoikunews.com/columns/global_business/2012/04/jobs_job.html

その12月1日号は、インド最大のTata財閥の総帥、ラタン・タタ氏の12月28日、75才の誕生日を期しての引退を伝えている。「Ratan Tata's Legacy ラタン・タタの遺したもの」（写真）。

44才のアイルランド国籍のCyrus Mistry氏（非Tataファミリーだが、Parsi族）にバトンタッチした、というもの。

<http://www.economist.com/news/21567390-ratan-tatas-successor-cyrus-mistry-has-some-dirty-work-do-pupil-master>

世界のビジネス界では大きな話題である。

が、日本人一般の関心を集めた気配はない。しかし、このTataが実は「ペルシャ、拝火教、松本清張、正倉院」とのつながりがあるとすれば、きっとその関心度は上がろうゆえ、筆者の個人的体験も含めてドキドキ感にあふれた、壮大なヒューマン・ドラマであるということを記したい。

Tataはイランを出自とする、ゾロアスター教徒、Parsi パルシー（＝ペルシャ）族である。

http://www.eigokyoikunews.com/columns/global_business/2009/01/parsi.html パルシーの商人

イスラム教徒の迫害を避けたパルシー教徒は1100年頃に、イラン（ヤズド地方）から船に乗り、インドの西海岸グジャラート州にたどり着いた。そして、12億の人口のインドで、20万人足らずのパルシー族が最大の財閥を形成できる土壌。インドという国は多民族、多宗教を包み込む共生の国だ。

松本清張は、奈良県飛鳥地方にある謎の石造物が、飛鳥時代に渡来したそのペルシャのゾロアスター（拝火）教徒が遺したものと考えた。

<http://janjan.voicejapan.org/world/0811/0811282389/1.php>

【ムンバイ同時テロ】 タージ・マハール・ホテル 炎上に思う。

清張はまた、『魔笛』（モーツァルト）とゾロアスター教とを語っている。

<http://janjan.voicejapan.org/culture/0905/0905274117/1.php>

さて、12月1日付けThe Economistは本文中で、ラタン・タタ氏の清廉さ（integrity）を挙げている。汚職まみれのインド（corruption-obsessed

India) で、汚職に反対する姿勢を毅然と貫いた (stood against corruption)。

と同時に、「タタ氏は、144年の歴史的企業の5代目に君臨して王様然として秘密主義で (being regal and secretive)、コンピュータハイテク部門のTCSには余り手を出さなかったと非難されている」と記している。the group's most successful business, TCS, its technology arm, is the one he left most alone.

この点、筆者には特記すべき思い出がある。

商社勤務だったある日、「インドに行って商売を探して来い」という命令が下った。家父長制下にあつては、上司の命令は絶対だ。(今の若い人には考えにくいだろうが)。

インド最大の財閥がTataと知った筆者は、インターネットの無い時代、テレックス (だったと思うが) にてその総帥ラタン・タタ氏に面談を申し込み、生まれて初めてのインドに出張した。外貨不足のインドに何かを売るのよりは、何か買うものはないか。ドキドキしながらその本拠、由緒ある「Bombay House」にて接見してくれたタタ氏に「何か買うものはないか?」と尋ねた。即答されたのは「コンピュータ・ソフトウェア」だった――。

コンピュータ・ソフトウェア! ?

それから知識吸収、業界調査、インドとの往復が始まった。双方のミッション交換もあり、日本事務所の設営まで行った。

実はその後、筆者自身の転職があり、成果については「Too Early時期が早すぎた」ということではあるのだが、今日、世界を席卷するインドのIT技術、システム・エンジニアリング力を目の当たりにするにつけ、あの時のRatan Tata氏の「先見の明」には感心するばかりである。

閉塞感に満ちた今の日本にとって、再度The Economist記事を借りるなら、学ぶべき「強烈な教訓 (powerful lesson)」がある:

* 外の世界から得るものは、失うものよりも遥かに大きい (India has far more to gain than lose from the outside world)

* 確たるグローバル化の主張 (a firm advocate of globalisation)

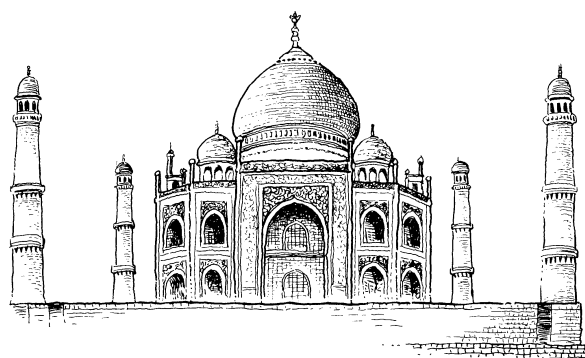
今日本で叫ばれる「グローバル化」「国際化」「フラット化」。その根には、時空を超えての「異文化・異宗教」という壮大なロマンがある。魅力にあふれた「ヒューマン・ドラマ」なのだと思えば、知的好奇心から、「知る」ことに大いに力が入ろうというものだ。「異文化理解」とは実は「(自分とは)異なる」ということの理解だし、異(ちが)うからこそその「魅力」である。

そこでは言葉(英語)が大いなる手段であることは言を待たない。KIP = Knowledge is Power / Pleasure.

http://www.eigokyoikunews.com/columns/global_business/2012/07/englishnization-knowledge-is-power.html

「参考」:

<http://www.economist.com/news/leaders/21567356-india-should-learn-career-its-most-powerful-businessman-ratan-tatas-legacy> 英文解説
<http://the-economist-j50bp.seesaa.net/article/305927371.html> 日本語解説



インド雑感－３ 中印関係と南アジア インドの苛立ち

高 尾 勝

中印の馴れ初め

漢の武帝治政（在位BC141-87年、55年間）の初期に、大宛、大夏（バクトリア、現アフガン）に及ぶ13年間の西域探検旅行から戻った張騫の「蜀・四川の布は身毒産」という報告で、インドの存在が中国に伝わった。AC80年には班超がバクトリアにクシャナ王朝を討っている。

BC2年に仏教が中国に伝わったがこれは間接的なもので、直接の中印接触は東晋の法顕がAC399年インド向けに出発したのが最初である（414年海路帰国）。更に629年唐僧玄奘がインドに向かい645年に帰国して646年に大唐西域記を完成するに及んで、インドのことが広く中国に知れ渡った。

この玄奘の訪印途次吐蕃（西藏）立寄りが契機と推測されるが、吐蕃統一者スロン・ツアン・ガンボが634年に使者を唐に送っている。

武帝治政の初期には、漢族と非漢族の妥協の産物 広東に南越、福建に閩越^{びんえつ}、温州には東欧の半独立国が在ったが、漢の南方経略でこの三国は漢の支配下に入った。南方経略に続いて更には衛青、霍去病、両将軍による再三の西域遠征が成功している。

周囲の諸国に利を喰らわせてでも朝貢させて中国の進んだ文物を賜る、と云う中華思想が綿々と続いて、当時の中国人の意識に於ける世界を拡大してきた。15世紀初頭には、明の鄭和率いる南海大遠征はアフリカ東岸にまで達し、セイロンは明に朝貢している。

インドから仏僧が中国に向かったこと、或いは小乗仏教とヒンズー教が海岸伝いに東に遠くはインドネシアにまで伝わったこと、は事実だが、中国のように国家的な意図の下での活動では無い。加えて6－11世紀に短命な群雄の割拠が続き、1398年にはチムール、1527年にはバーブル（ムガル帝国の始祖）、と云う中央アジア民族の覇者に支配された。

時あたかも、西欧強国の東方経略が始まり、イギリスが1600年に東インド会社を設立したのに

続き、オランダが1602年、フランスが1604年に夫々東インド会社を設立、東方経略を競い始めたが、その経過或いはその結果について触れるのは省く。

斯様次第で、中央アジアからの王を含め、インド人が古来から東西に打って出たと云う記録は寡聞にして承知していない。

現代の中印関係

時は移り、2013年5月6日にカシュミールを巡る中印部隊の対立が解決した、と報道された。これは古くて新しい問題であり、火種はイギリスが熾し、中印が引き継いだもので今後もボヤがでるだろう。イギリスのインド経略を概観すると；

- 1639年 マドラスを獲得したのがインド経略の手始めで、
- 1690年 カルカッタ建設
- 1796年 セイロンをオランダから奪取
- 1858年 ムガル帝国滅亡しインドはイギリス王直轄地に
- 1886年 ビルマ王降伏。
- 1890年 シッキム条約 英 チベット/インドの国境策定を期す（英 1903 - 4年チベット侵攻ラサ占領す）
- 1912年 カルカッタからデリーに遷都
- 1914. 3 マクマホン・ライン画定（カシュミール、シムラで英/チベット秘密裏に会合しチベット/インドの国境を画定す）
- 1945. 8.15 印パ分離独立（パキスタンは8月14日独立）

第二次世界大戦後、当然のことながら、中華人民共和国はマクマホン・ラインは帝国主義の遺物で承認し難いとの立場を採った。然しながら、1960年ビルマとの国境策定で若干の修正をしたが、実質上マクマホン・ラインを国境として承認した。

対印では未確定として、Kashmir の Aksai Chin 領有を含めて再協議しよう、とする中国に対して、インドは国境線は確定済みとしている。

中印国境は、下記のように三大別できる；

新疆ウイグルとKashmirが接する西部

ネパールの西側で西藏とインドのHimachal Pradesh州・UP州が接する中部

ブータンの東、西藏とArunachal Pradesh州が接する東部

中印両国の主張の主な点は、

中国は、双方の行政管轄範囲に基づいて古くからカラコルム山脈、ヒマラヤ山脈の南麓に沿って伝統的な慣習線が形成されてきた。この慣習線を基礎に話し合いで国境策定すべし、と主張。具体的には東部のArunachal Pradeshは元来中国領としている。

インドの主張は、東部では慣習線よりも遙か北方を走るマクマホン・ラインを、中部では慣習線を、西部では中国領になっているアクサイ・チン地区はインド領、とする。

1960年4月、ニューデリーでのNehru/周恩来会談での解決努力にも拘らず、1962年10-12月中印戦争勃発。70年代初めから和解の動きが始まって、80-81年両国会議が開かれたが、解決には至っていない。尚、中印戦では冬季山岳戦力不備のインドがやや不利だったので、インドは教訓にしている。

中国の南下

嘗ては、北の強国が不凍港を求めるのが南下だったが、現代ではシーレーン維持、海底資源確保、地政学的戦略など諸要素が絡んでいる。

南アジアでは、対印問題を抱えるパキスタンが、この30年来中国と何かと提携してきているが、近時中国はミャンマー、更にはバングラデシュ、スリランカに援助の手を伸ばしてきており、インド包囲網構築か、とインドの神経を逆撫でしている。

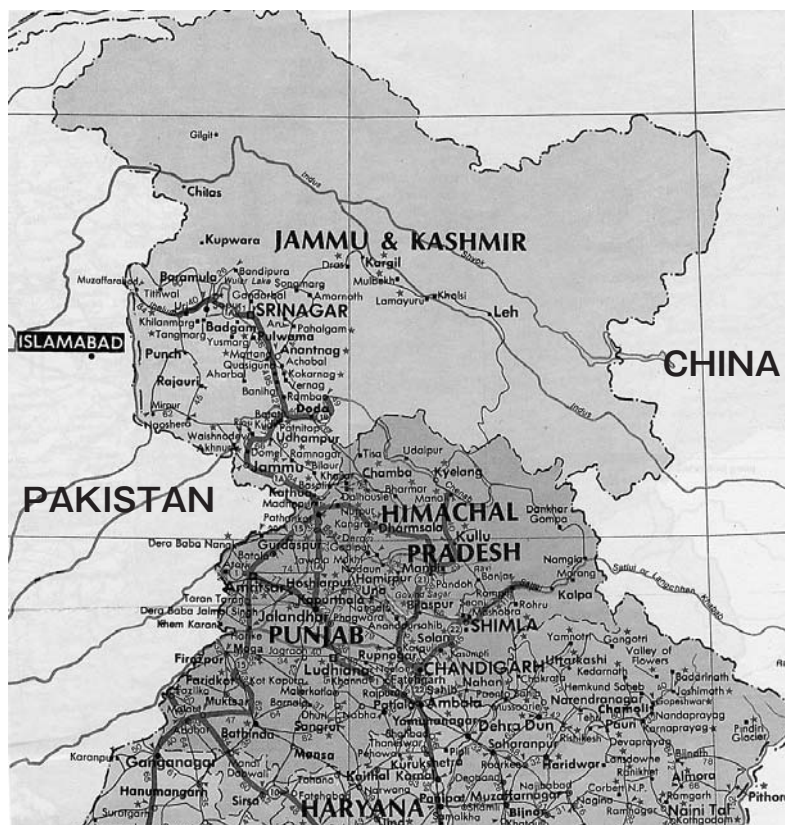
カラチの西約460kmに在るGwadar港はシンガポール政府系のPort of Singapore Authority (PSA)が2007年に建設し40年間の管理契約を結んでいた。この港湾建設費\$248百万の実に83%が中国の資金援助によるものであった。管

理契約に伴う港湾付随土地の払下げ問題が紛糾して今年初めにPSAは契約破棄し、パキスタン政府は得たりや応と中国に管理権をオファーしてChina Overseas Port Holding Companyが管理権を2月18日に継承した。

この港は中国のKashgarとKarakoram High Way - Indus High Wayと高速道路で結ばれており、中国西部産品の対欧輸出にも寄与するが、軍事的利用、と云う二面的利便性を持つ。中国は30億ドル相当の6隻の潜水艦と軽ジェット戦闘機の供給を約しており、2012年の両国貿易高は120億ドル。港の譲渡は両国友好の錨であるようだ。

中国はバングラデシュのChittagong港整備を通じて、スリランカのHambantotaに新港を建設して、両港に基地建設済みで、パキスタンのGwadar港を合わせてインド包囲の真珠の鎖、とインドは見做している。

スリランカ政府軍がTamil Tiger殲滅に利用した大量の武器は中国供与のもので、内戦後のインフラ面で中国は20億ドルを超える投資をしている。Hambantota港はRajapaksa大統領の郷里に在り、更にこの海港から40kmの地点に中国はスリランカ第二の国際空港を建設し、去る3月18日に開所式が行われた。スリランカが中国に取り込まれつつあることが特にインドを苛立たせている。



ベトナムのいま

一陽邑山

はじめに

ベトナムは、アジアにおいて古くからたいへん重要な地位を占めていた。日本からみても、朱印船貿易時代の中継基地であった。中部の港湾都市ダナンの近くにホイアンという港町があって、ベトナムの有する6つの世界遺産のひとつに指定されているが、そこには昔の日本人町が残されている。

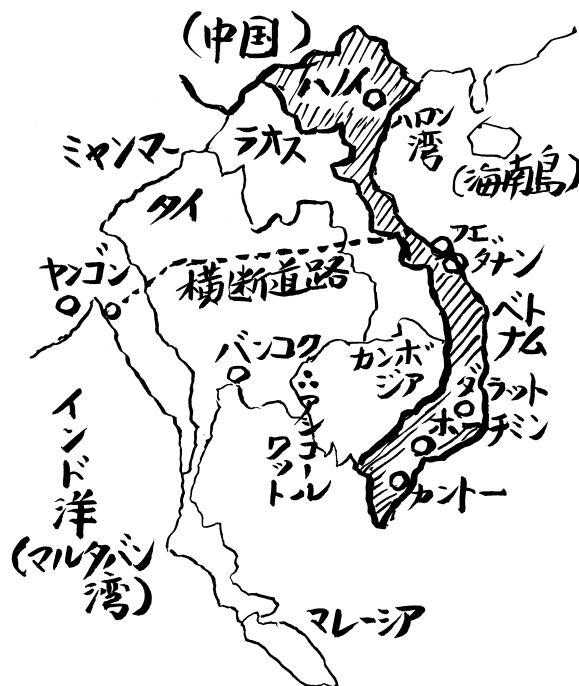
現在においても、その位置の重要性は変わらない。今では、ベトナムはアセアンの一員であり、その国土は世界に向かって開放されている。中国の改革・開放と同様に、早くからドイモイという開放運動によって外資を誘致しながら、経済発展を図ってきた。投資を受け入れるための外資法の体系を整え、道路・港湾などのインフラを整備してきた。この多くが、日本のODAによって行われ、双日など日本の商社の造営する工業団地も多い。

中国での生産コストが上限に来て、知的財産権の流出の危惧もあるなか、中国を消費市場と捉え、生産地を他国に移すことを検討している日本企業が多いが、中国に代わる、あるいは新規のアジアでの投資先として、ベトナムを検討する日本企業が多い。

ベトナムの概要

地図でわかるように、ベトナムは、アジア大陸の東側、中国の南側に、太平洋に沿って長い海岸線をもち、南北に細長い。面積は日本から九州を除いたくらい。人口は8600万人、首都ハノイは700万人足らず、南部の商業都市ホーチミン(旧名でサイゴンとも呼ぶ)は700万人余りで、この2都市がとくに大きい。ハノイが北のホン河のデルタの中心なのに対し、ホーチミンは南のメコン川支流のデルタの中心で、両都市ともにフランス統治時代の面影を残し、ホーチミンはとくにそうである。ともに近年の急激な経済発展のために、交通渋滞や排気ガス被害がひどいが、ともに都市部が郊外に発展していて、地下鉄が延び、そこでは市民が快適な郊外生活を楽しんでいる。日系企業の立地も、両都市周辺が圧倒的に多い。

この2都市が南北の平野部にあり、国の真ん中



〔インドシナ半島の地図〕

はくびれて細い山間部となっている。このくびれのあたりに、ベトナム戦争中に南北ベトナムを分けた北緯17度線があって、港都ダナン・世界歴史遺産フエ王宮や、昔の日本人町が残る世界文化遺産ホイアンがここにある。ハノイとホーチミンを南北に結ぶ主幹国道は、昔はダナンの近くでハイヴァン峠という山道を通っていたが、日本のODAでトンネルができ、便利になった。ダナンの港も日本のODAで整備され、ダナンから西に向かってラオス・タイを横切り、ミャンマーのヤンゴンに近いインド洋の港に至る国際産業道路ができ、弓形のベトナムの国に矢が備わった形となった。ダナン港に近い工業団地にも、日系企業が多く立地している。貿易・投資に必要なベトナムの情報は、JETROなどで得られる。双日は日中友好商社第1号(ニチメン)であるとともに、日越友好商社第1号(日商岩井)でもあるから、双日のハノイ・ホーチミン事務所も訪れたい。

ベトナム観光のために

ベトナムをよく知るためには、まず観光旅行で訪れるとよい。ベトナムは観光立国でもある。ベ

トナムへは東京・大阪・福岡などから飛行機が毎日飛んでいて、多くの旅行会社が8日間前後のパックツアーを種々用意している。ハノイから入って中部のダナン・フエなどを見て、ホーチミンを見てから日本に帰る旅程もあれば、その逆のルートもある。日数は多くなるが、途中でベトナムからそしてカンボジアに入り、アンコールワットを見てからまた、ベトナムに戻る旅程のツアーがあれば、私の経験からお勧めしたい。

ハノイ市内では、オペラ劇場や大教会など、フランス風建築が楽しめる。

ハノイから日帰りで行復できる世界自然遺産ハロン湾は、「海の桂林」とも呼ばれ、散在する奇岩・奇峰を眺めながらの舟遊びが楽しい。

中部ではフエ王宮と、古都フエの静かなたたずまいを鑑賞したい。ホーチミンの近くまで南下していくと、山間部にダラットという避暑地があって、フランス人が作ったホテル・レストランなどがあり、私が訪れたときは、日本人の華道家が催したランの花の大きな展示会のあとで、多くの花が残されていた。ダラットは、通常のツアーには含まれないことが多い。

ホーチミンはベトナム最大の都市であり、活力にあふれた近代都市でありながら、随所にフランス統治時代の面影を残す、美しい町である。快適なホテルやレストランが多く、歴史的な建造物も多い。ホーチミンからさらに南へ行くと、メコン川河口のデルタ地帯となる。ホーチミンに近いミトーと、ホーチミンからさらに遠い、メコン本流に面したカントーとが、その観光の拠点である。カントーまで行くと、メコン下流の悠久の流れに接し、近くのデルタに散在する中州の島々に上陸する舟遊びを楽しむことができる。

おわりに

ベトナムの現政権は、共産党の元指導者「ホーおじさん」への国民の絶大な信頼を引き継いで、今も国民の強い信頼を得ている。フランスからの独立後に続いた、ソ連が支配するコメコンから解放してくれたということで、厳しかった戦争にもかかわらず、対米感情はよい。ベトナム人は今の憲法を、仏米支配からベトナムを解放した、マグナカルタだと思っているようだ。

対日感情もまたたいへんよい。ホーチミンの作戦博物館に行けば、世界各地で繰り広げられた、ベトナム戦争反対デモの写真が飾られている。米



世界遺産フエ王宮にて；上二枚が筆者、
下は、故久澤克己さん

国各地でのデモ、日本でのデモの写真もある。とりわけベトナム人が感謝しているのが、大きく飾られているサワダさんの報道写真で、ベトナム人の母親が戦火を逃れるために、子供たちを連れて懸命に川を泳いで渡っている。サワダさんは戦場で亡くなったが、この写真が世界に報道されて、戦争を終わらせる大きな力となったと、館員が大きな声の日本語で説明してくれた。

ベトナム戦争時に韓国の用兵が米軍とともに参戦したので、ベトナム人の対韓国感情はよくない。数十年前のこうした記憶が今もベトナムの人たちの心に残っていて、歴史を知らない日本の若者たちの現地でのビジネスに影響しかねない。心得ておくべきことであると思う。

ミャンマー(MYANMAR)駐在記

～アウンサン・スー・チー来日に寄せて～

丸 野 純



4月末にアウンサン・スー・チー女史も来日、彼女が且つて留学していた京都大学を訪問したことが大きく報道されました。また、安倍首相も5月下旬にミャンマーを訪問しました。日本の総理大臣としては30数年ぶりとのことだそうです。

まさに、ミャンマーがブレイクしています。

だからでしょうか。元の上司である長谷川さんから「ミャンマーに居たんだから、ミャンマーで何か書け!」とのご指示を頂きました。

確かにヤンゴンの支店長をやってはいましたが、それはもう20年前の話(1992年4月～1995年4月の3年間)。その後も仕事で数回行きましたが、今世紀に入ってから一度も行っておらず、とても「ミャンマー NOW」を書く事はできません。

米国の大統領がミャンマーを訪問するなんて、私の赴任していた時代には考えられません。

と言う事で、ミャンマーと言う国名についてちょっと書かせて頂くことにしました。

因みに、私は昭和50年(1975年)入社、機械総務部計算課に配属され、その後、原動機部に異動し、バングラデシュのダッカに2回駐在し、当時は業務本部調査部に在籍しておりました。

私が赴任したのは1992年4月1日ですが、当時のミャンマーを取り巻く国際環境は最悪でした。

母親の看病の為に英国から帰国していたスー・チー女史は、反政府勢力(民主化運動)に担がれるかたちで、翌年実施される予定の選挙への参加を表明。

しかし、軍事政権により、あっさり自宅軟禁(1989年7月)されてしまいました。

翌年(1990年)5月に行われた総選挙では、そのスー・チー女史を担ぐ国民民主連盟(NLD)が大勝するものの、負けた軍事政権は、国家の安全を理由にそのまま権力を手放すことなく、政権の座に居座ってしまいました。

軍事政権に対する国際批判が高まる中、翌年(1991年)には、スー・チー女史が自宅軟禁されたまま、ノーベル平和賞を受賞。選挙で負けたにもかかわらず権力を手放さず、且つ、ノーベル賞受賞者を自宅軟禁している政権など前代未聞。当時のミャンマー軍事政権が、フセインのイラク、金日成の北朝鮮とともにアジアの三悪独裁政権と言われていたのも仕方ないことだったでしょう。

当然のことながら、米国を筆頭に日本を含む先進国及びADB等の国際機関からの援助は全て中止。これでは、直近でのミャンマーの商売の可能性は限りなくゼロに近いものになってしまいました。

しかし、ヤンゴン支店と言うか旧ラングーン支店は、わが社にとって歴史と伝統のある店であり、ミャンマーの国としてのポテンシャルや将来のことを考えれば、そう簡単に閉めるわけにはいかなかったでしょう。

こんな状況では、後任者の選考基準も多分「仕事はともかく、まずは体と心が壊れない丈夫な奴



UCLAF社農薬セミナーで地方出張；
右から5人目、筆者



上記セミナーで挨拶する筆者

を」と言う事だったに違いありません。確かに、私が赴任する年の前年の暮れ、亀井業務本部長(当時)に「君が前に駐在していたのはバングラだったね。」と確認されましたし、翌年の年明け、駐在を言い渡された時には「今度の所は、前の所よりいいからネ。」を言われました。

と言う事で、1992年4月1日、ヤンゴンに着任しました。

ところで、皆さんご存知だとは思いますが、ここでちょっと「ミャンマー」という国の名前について、話をしてみたいと思います。

私が赴任した時を遡ること3年、1989年6月、軍事政権は国名の英語表記をビルマ連邦(Union of Burma)からミャンマー連邦(Union of Myanmar)に、首都の呼び名もラングーン(Rangoon)からヤンゴン(Yangon)に変えました。その他にもパガンをバガン、ペゲーをバゴーなど多数の都市名の英語表記を変更しています。但し、ミャンマー語(ビルマ語?)の表記は変え

ていません。

スーチャー女史や米国を筆頭とする西欧諸国等などは「軍事独裁政権が一方的に決めた国名変更は一切認められない。ビルマはビルマだ。」としておりました。

日本政府は国連が国名表記変更を認めたので、同様に受け入れていましたが、朝日新聞や多くのマスコミは「ビルマ」と表記し続けていました。ニュース・ステーションでも、久米宏さんは「国民に支持されていないビルマ軍事政権が勝手に変えたミャンマーは使いません。」と「ビルマ」と言い続けていました。

その為、ミャンマーという国名は、日本で必ずしも十分浸透していませんでした。私が「今度、ミャンマーのヤンゴンに赴任することになりました。」と挨拶すると「えっ、それ何処?」と聞き返されたり、「ああ、ビルマのラングーンね。」と言われるし、この人は年配だからと「今度、ビルマのラングーンに」と言うのと「ミャンマーのヤンゴンだね。国名変わっているよ。」と言われる始末。

どちらの名称を使用するかによって、政治的なスタンスを問われている部分もあり、仕方がないので、「ビルマのラングーンと言うか、ミャンマーのヤンゴンに行ってきます。」などと挨拶していました。

さて、BurmaとMyanmarは、何かどう違うのでしょうか?

「ミャンマー語では、文語でミャンマー、口語でバマーと言い、このバマーをイギリス人が聞いて勝手にバーマBurmaと呼んだ。(他の説もある)」と言うことらしいのです。

これを日本に例えて、ざっくり言えば「ニホン、ニッポン、英語ならジャパン」という関係に近いのではないのでしょうか。

今、日本はオリンピックでは「JAPAN」と言うプラカードを掲げ、JAMAICAの次に行進していますが、英語での国の名称をNIPPONに変更し、それを国際社会が認めてくれれば、「NIPPON」のプラカードを掲げ、NIGERIAの次に入場してくることになるでしょう。

次はリオデジャネイロだから、ポルトガル語表記でという事になればーっ判りません。



軍政下、ヤンゴンのタマドウ病院へ薬を寄贈；
現地新聞に載る

ただ、日本語では表記は、勿論「日本」です。

では、何故、軍事政権はこんなことをしたのでしょうか。色々理屈を言っていますが、本音は、「イギリス人が勝手に間違えて呼んだ名前を本来の発音に近い名前にすることにより、ナショナリズムを煽り、政権としての求心力を高めたい。」と言うか、簡単に言えば、人気取り策だったのでしょう。

私がバングラデシュに駐在していた時も、政府が突然、首都ダッカの名称を「Daccaから本来の発音に近いと言うDahka」に変更しました。しかし、「そんな事をする前に、やるべき事が山程あるだろう。」と言う事で、民衆には極めて評判が悪かったです。

お金がなくてもすぐできる事なので、植民地だった途上国ではありがちな政策です。

尚、日本語の「ビルマ」はオランダ語（カポルトガル語）の発音から来ているようです。

ただ、このMyanmarを「ミャンマー」と表記することについては、日本政府の内部で相当紛糾したようです。

と言うのは、外務省がMyanmarはその発音から「ミャンマー」と表記すべきと説明したところ、文科省が「日本語に“ミヤ”などと言う発音も表記もない。ミャーミャー言っているのは名古屋人だけ、“ミャンマー”と表記すべき。」と反論したかどうか、兎に角、揉めに揉めたそうです。

どのような力が働いたか知りませんが、結局、特例として“ミャンマー”が認められたと聞いています。

多分、「きゃりーぱみゅぱみゅ」のファンだからと言って、娘や孫娘に「ぱみゅ子」と名前を付けて役場に届けても、一喝されて受け付けて貰えないでしょう。

それとも、今は何でも有りだから、「ぱみゅ子」は出現するのでしょうか。

そして、ローマで生まれたから「伊都子」じゃないけれど、ミャンマーで生まれたから「ミャン子」も出現するのでしょうか。

NMTKNMTK *会報への寄稿お願い* NMTKNMTK

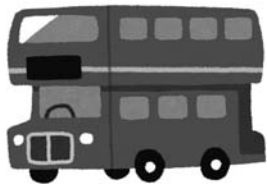
会員各位のご協力により、OB会誌として、更なる内容充実に努めたいと存じます。

内容は問いません。未だに現役の人も、完全リタイアの人も、今を如何に楽しく、有意義に過ごしているか、同期会、部門別OB会、同好会、仲良しグループの様子もお伝え下さい。

海外駐在記、現役時代に遭遇した出来事、貴重な経験、苦労話、感動物語、旅行記、ボランティア活動、趣味、健康法、ETC。

原則として、文章の長さは 1～5 頁 Max.、出来ればパソコンのWORDSで、あるいはE-mailで発送。タイプしたものが望ましいが、手書原稿も可です。

送付先は、東京社友会 会報チーム宛て、もしくは会報チーム世話人の誰でも受け付けます。（裏表紙の世話人連絡先ご参照下さい）。



(続々) イギリス徒然

柴 田 隆

米国の「禁酒」、英国の「節酒」

アメリカで1920年に禁酒法が制定された。エリオット・ネスの活躍する映画“アンタッチャブル”の世界である。

ニューヨークでは、禁酒法以前の酒場の数は15千軒だったのが、禁酒法時代にはもぐり酒場が37千軒に増え、飲酒運転逮捕者が禁酒法制定の1920年と1927年を比較すると約47%増加したそうである。密造酒の利権をめぐるギャングの抗争は熾烈を極め、ギャングの平均寿命が55歳から38歳に下がったと言われている。

これでは「禁酒法」ではなく、「飲酒奨励法」だったことになる。結局1933年に禁酒法は廃止される。

禁酒法が廃止になることを聞きつけた新聞記者がエリオット・ネスに“禁酒法がなくなるとどうしますか？”と聞くと、“一杯やるさ。”とネスが答えたのは印象的だった。映画のラストシーンである。

イギリスではアメリカの禁酒法より100年以上早く1830年に禁酒協会が出来ている。

産業革命で生まれてきた、“刻苦勉強”を旨として真面目に働く中産階級が“酒に溺れる貧しい労働者階級”の生活態度を改めさせようとして、禁酒運動を展開した。

この禁酒協会の会長だったビクトリア女王が“絶対禁酒は不可能であり、個々のケースにおいては必要だとしても、一般的手段として強要すべきではない。”と言っているように、イギリスでは“禁酒”ではなく“節酒”であった。

要するに、“酒を一切止めるのは無理だから、節度を持って飲みましょう。”と言うことだったようで、これでは実効が上がりなかった筈である。しかしこれは何でも極端に走るアメリカと違う、イギリスの常識主義の良いところである。

結局、「禁酒」も「節酒」も、酒飲みには効き目がなかったと言うことである。

武士は相身互いの融通性

イギリス人は酒にだらしないが、私はこの酒飲みのイギリス人男性が大好きである。

ある日曜日、営業時間が終わった14時数分過ぎにロンドン ブリッジの近くのパブに入った。ビールを女性ウエイトレスに注文したが、“営業は終わりました。”とすげなく断られた。諦めて出ようとしたら、横にいた男性のウエイターが黙ってジョッキにビールを入れて出してくれた。

一昔前は、国際線のエコノミーはアルコールは有料であった。ある時ブリテイッシュ エアウェイのエコノミーでスチュワード（スチュワーデスではない。）に何か忘れたがアルコールを注文した。持って来てくれたので、代金を払おうとすると“後でくる。”とウインクして行ってしまい、そのまま集金には来なかった。

ロンドンから車で2時間位のところにフィーバー キャッスルがある。ここは、6人も妻を替えたヘンリー八世の2番目の妻—アン・ブリーンの生家である。この庭がきれい。秋に一度訪れ、翌春になって水仙を見に再度出かけた。

秋に来た時、その近くにある田舎のパブに立ち寄ったのを思い出して、14時を少し過ぎていたが、その時も寄ってみた。前は年輩の主人だったが、今回は若い男であった。ビールを注文したが、断られた。ふと横を見ると、前回来た時、話をしたコンピューター会社に勤務しているという夫婦がいた。この光景を見て、そのコンピューター氏がカウンターの中の若者に何か声をかけた。すると、彼はジョッキにビールを注いで出してくれた。

“??”と戸惑っていると、“あなたは私の父の友達です。お酒の販売は禁止されていますが、父の友人をもてなすのは禁止されていません。”とにやっと笑ってあちらへ行ってしまった。

コンピューター氏に相談すると、次来た時に代金を払えばよいと言うのでご厚意に甘えることにした。（結局再訪せずに帰国してしまった。）

このような経験から、酒好きなイギリス人の男性は酒飲みとして“武士は相身互い”の精神をもっていると信じるようになった。

この“武士は相身互い”の融通性は、“ええかげん”で、“ちゃらんぽらん”に見えるが、この様なよい意味での融通性は一種の潤滑剤となって、世の中を住み易くすることになる。

書評

「みんなの家庭の医学」 幻冬舎

澁 谷 義

本書は、テレビ番組「たけしの健康エンターテインメント！ みんなの家庭の医学」を元に編集されている。毎回日本全国の名医が出演している人気番組。人間の身体は厄介なもの、さまざまな病気、痛みに襲われている。普段の生活習慣で気をつけることが肝要である。本書の要点を紹介してみよう。

- 1) 肩こり：日本人、特に女性が訴えるカラダの悩みで最も多いのが肩こりである。パソコン作業中などでのTCH(歯と歯を接触するクセ)が、肩こりの原因になる。肩の周辺の僧帽筋の疲労が肩こりを起こす。日本人に広く蔓延しているのがストレス脳。脳の使いすぎ等が原因。肩こり、身体のだるさなど引き起こす。身体をリラックス、好きな音楽などを聴くと効果ある。
- 2) 便秘：腸には神経細胞があり、便秘の人は神経細胞が正常に動かないため。不規則な生活が原因。
- 3) 冷え性：日本女性の約7割が冷え性で悩んでいる。身体的冷え性とストレスなどの精神的な要因の冷え性もある。40～42度のお湯に10分間つかる間にストレッチを行うと効果がある。
- 4) 生活習慣病：ガン、狭心症、心筋梗塞、脳梗塞、脳出血、糖尿病など。遺伝的な要因もあるが、主な原因は、過剰摂取、喫煙、飲酒、運動不足、ストレスなど。野菜など食物繊維を多くとることが肝要。ゆっくり噛んで食べることも大事で、血糖値の上昇を抑える。
- 5) オシッコ、頻尿の悩み：オシッコが一日8回以上、夜寝ている間に一回以上、残尿感。
男性の場合は、前立腺肥大症、女性は骨盤臓器脱。睡眠時無呼吸、心不全、腎臓病、足のむくみの症状もチェック。高齢化で私も頻尿気味である。
- 6) 帯状疱疹：神経がヘルペス・ウイルスに感染することで、痛みを伴い皮膚に帯状の疱疹が広がる。紫外線がヘルペス・ウイルスを活性化、慢性的疲労で免疫力が下がって起きる。
- 7) 花粉症体質の改善：今や日本人6人に1人、約2000万人が花粉症。舌下免疫法が開発され期待される口から継続的に花粉エキスを取り入れ、免疫細胞を花粉に慣れさせておくことで、鼻から花粉が入っても拒絶反応が起きなくなる。2014年の正式認可を目指している。今春の花粉はひどい。花粉症はないと思っていたが、私も朝方くしゃみ、鼻水が少々出る。
- 8) 血管を若返らせる葉酸：ビタミンB群の一種で、血管の老化を防ぐ効果がある。菜の花、枝豆、モロヘイヤ、海苔、わかめ、うなぎの肝などに含まれる。

「映画、舟を編む」

澁 谷 義

暫くぶりに映画鑑賞した。2012年の本屋大賞第一位の三浦しをんの原作も読んでおり、興味をもった。15年にわたる「大渡海」という大辞書編纂をめぐる言葉との格闘が描かれている。辞書とは、その大海に浮かぶ一艘の舟。人は辞書という舟で海を渡り、自分の気持ちを的確に表す言葉を探す。風変わりで異様とも言えるストーリーである。

主役は玄武書房で辞書編纂に励む馬締(まじめ)光也を演じる松田龍平、その恋人役・料理人の林香具矢の宮崎あおい、早雲荘の家主タケの渡辺美佐子、馬締の上司の鶴見辰吾、小林薫、オダギリジョー。監修の国語学者の加藤剛、その妻の八千草薫などである。監督は石井裕也1983生まれで若い。辞書編纂に邁進する主人公の馬締らの生き様を描いた。

辞書を作る過程は、編集会議、用例採集、見出し語選定、原稿執筆、レイアウト、校正、印刷・製本と、気の遠くなるような作業工程の道のりがある。

原作の著者・三浦しをんは、素晴らしい映画になったと賞賛。著者は時代をあいまいにしていたが、映画は時代設定、時代考証も厳密に徹底していると評価している。



若者言葉の収集も面白い。ダサイ、チョベリグなアイデア、マジ、ヤバイ、超ウケなど。

私も国語辞典や外国語（英語、西語、仏語、中国語、韓国語など）の辞書を何となく読むのが好きである。貪欲に外国語を習得する意欲は薄れているが、辞書の海をさ迷う興味は尽きない。

奇妙な二階建ての符号:ゲートと本居宣長のこと

竹 内 可 能

桜に生き、桜に死す、といわれた西行の辞世の歌とされている、「願はくば桜の下にて春死なんそのきさらぎの望月のころ」

この西行の一首はどわれわれ日本人の人口に膾炙した歌はあるまい。それに比べれば同じ辞世の歌であっても、本居宣長の一首を知る人は少ない。その歌はといえば、

「山室に千歳の春の宿占めて風に知られぬ花をこそ見め」
というものだった。

この歌は宣長が生前に伊勢松坂の地に手ずから命じて造った自前の墓の石碑に刻まれたもので、それは山室山というのだろうか、山というよりは塚とでも呼ぶべき小高い山地の中にある。宣長が桜の木々に囲まれながら黄泉の国にあっても永遠に、この春の宿を独り占めして、風に散ることもない桜の花を見て過ごそうか、と歌いこんだものであろう。

ある春の日の朝であった。

私は前夜来、寝しなの枕辺で思い起こそうとして思い出せないまま、不機嫌な朝を迎えてしまったのは、本居宣長の上述した短歌の片言が気にかかっていたからであった。

もうかれこれ10年近くにもなろうか、わが夫婦もご多聞にもれず伊勢松坂の地を訪れた時には、小林秀雄の「本居宣長」にあやかるようにして、故人の住居跡と件の墓前に参上したものだ。

私がその頃暗記したつものの、しかし今思い出せなかった片言というのは「風に知られぬ花をこそ見め」の中の、「知られぬ」という措辞であった。

とまれ、その日の朝は前日が雨まじりの春一番が吹き荒れたのとは打って変って、葉桜のうすみどりが薫るようなすがすがしい一日の始まりであった。その起きがけの瞬間だった。何のことはない、忘れかけていた歌の文句「知られぬ」が素直に脳裏に戻ってきたのである。私は認知症の宣告を免れでもしたかのように安堵した。

ところがである。奇妙なことが起こったのは次の瞬間であった。近くにいたこれも起きがけの妻が突然なにを思ったのか、私に向かって口を開く

と「あなた、あれって何だったかしら？」

私は私で、頭の中の今思い出したばかりの宣長の歌から我に返ると、「あれって一体なんのことだ？」と切り返した。

最近はこの私にかぎらず妻までが、何かにつけて物忘れがひどく、加うるに普段の会話の中で使う主語が、やたらに「それ」だの「あれ」といった不定代名詞にとって代わるものだから、唯さえ会話が意味不明になりやすい。この場合もその口であった。

「あれってさあ、ほら本居宣長のお墓の歌の切り出しの、山なんとかいう、山の次にくる言葉ってなんだったかしら？」そう云いながら後につづく歌の文句はスラスラ出てくるところを見ると、彼女が思い出せないのは「やまむろ」(山室)という冒頭の文句だったのだ。

夫婦どうしのことであれば日常同じ瞬間に同じことを考えていたとしても、いくらでもありうることだろう。それに桜の散り具合が例年になく早かった今年の春の朝といえば、それが西行法師の辞世の歌ならばさもありなんだろう。しかしながら一昔ほどもその昔、夫婦つれだっただけの地に墓参したことがあるからといって、この朝起き掛けの同じ瞬間、宣長の墓碑に刻まれた浮世離れな辞世の歌を思い起こそうとしていた、わが夫婦の間のこの符号は一体何なのか。私は薄気味悪くさえ思ったものだ。

道元禅師によれば、時間というものは生きとし生けるものの個体に固有のもので、松にも竹にもそれぞれの時間があるとした。まして夫婦といえどもそれぞれの時間は、また別々に存在するというのが、禅師の説くところであろう。しかしあの朝の瞬間は、お互いが一生の間にそれぞれ固有に持す億劫の秒間の中の、またとない共通の符号だったといえるかもしれぬ。

もっともそうした双方に共通の瞬間が全くの偶然によって展開したのかといえそうではない。そこにはそれ以前にわが夫婦の間の奇妙な符号が介在していたのである。

まず片割れ的一方である妻の側から見ればこちらの話は単純である。彼女によれば、桜の花が今

年はいつになく早めにやってきた暖かい陽気につられて、10日ほども早く散ってしまった無聊を口にしてみただけのことだったらしい。

口にした花の歌のことが、西行法師ではなく本居宣長のものだったということが、この場合の不思議な符号の因果につながったまでである。

もう一方の片割れである私はといえば、それにはまず私が目下読書中のエッカーマンという人の「ゲーテとの対話」なんていう、堅苦しい浩瀚な読み物のことを持ち出さねばならない。いまさらゲーテでもあるまい、とでも言われればそれまでだが少し辛抱して聞いてほしい。

実はこの歳になってもというべきか、私は古今東西の天才といわれる人物には強い興味を持ち続けてきた。最近では近所に住む超読書好きな先輩氏から、いつものように回し読みにと回されてくる本の中でも、鹿島茂の「情念戦争1789-1821」とか、藤本ひとみの「皇帝ナポレオン」とかが、面白おかしさを通り越して、英雄ナポレオンに対する私の知的好奇心をくすぐるのだ。

というわけで、今はそれならいっそのことこの英雄と同時代を生きることになる、天才詩人ゲーテと楽聖ヴェートーベン、それに私の好きな近代哲学の巨星ヘーゲルを交えて、ゲーテ自身が云うところのシュトルム・ウント・ドラング（疾風怒濤）の時代を歴史的に鳥瞰してみたいなどという、野望が頭をもたげはじめていた矢先だった。

これら綺羅星のような世界史的な天才たちが、こぞってというほどに、それぞれにたとえ一時とはいえ、フランス革命後のナポレオン将軍の出現に歓喜したという事実が、私の好奇心の背中を押したのである。

そこで私は手始めにゲーテをわが師と仰ぐエッカーマン著す「ゲーテとの対話」を読み始めていたというわけだった。私は「若きウェルテルの悩み」や「ファースト」以上にゲーテ自身のことをもっと深く知りたかったのだ。この書はさすがにゲーテの側近の手になるものだけあって、日記風に表される記述は、ゲーテの日常や思想が余すところなく行きとどいていて興味尽きない。

たとえば、ゲーテがナポレオン将軍に抱いていた尊崇の念や、ナポレオンがゲーテの「若きウェルテルの悩み」の愛読者だったこと、或いは、ちょっとしたことがきっかけで、やっとうごぎ着けたゲーテとヴェートーベンの会談が、お互いに気

まずい結果を招来し、爾後二人は全く疎遠な関係に陥ったこと、或いはヘーゲルとの会談ではゲーテが彼に尊敬の念を惜しまなかったにせよ、彼の哲学には興味を示した痕跡が皆無だったこと（もともと彼は形而上学といったものを無用の長物と判じていたきらいはある）などなど。

これを読んでいるうちに私はあることに気がついた。かねてから私は天才というものを考えるとき、天才と狂気は紙一重の存在だというふうに理解してきた。ところがゲーテについていえば、彼はそうした天才とは明らかに一味違うことに私は気がついたのである。

彼が有り余る詩才と学才（解剖学とか鉱物学或いは植物学といった分野で、いっばしの功績があるといわれる）、それに博覧強記をかねそなえた無類の天才的文化人だということは、疑いをさしはさむ余地もあるまい。しかしその彼をもしも天才的芸術家というには、そうした芸術家特有のディオニュソス的とでもいうべき激情・陶醉・熱狂を、この天才の資質の中に探し出すのは困難であることを知ったのだった。

意外にも彼の天性というべきものが、中世の天才詩人ダンテなどとは違って、むしろ晴朗、常識そして調和といった太陽神アポロ的な気質であることが私には驚きであった。彼自身の云う「疾風怒濤」の時代にあって、ゲーテの「平静」が不思議にさえ思えたものである。

そう思うと私はつれづれなるままに、小林秀雄の名著とされる「本居宣長」のことを連想していたのである。作者はこの著作の中で主人公宣長が「古事記」に没頭するあまり、皇統の神々への信仰にのめり込む姿に狂気を認めながら、その彼が日常の実生活者として示す市井の一常識人・家庭人ぶりを、婉曲ながら驚嘆をもって描いている。

ゲーテの生涯が「恋狂い」に彩られていたとすれば、宣長のそれは「神狂い」とでも言おうか。しかしゲーテの恋狂いは、あの時代の貴族社会のいわば常識の範疇だったことは確かなことだったし、宣長の神狂いも「古事記」にかまけるあまりの机上や紙上のものだった（上田秋成との神学論争などがそれにあたろう）。それぞれに個性はあまりにアポロ的で、酒神ディオニュソスの入り込む余地など見当たらないところが共通して面白い。

ゲーテと本居宣長を俎上にしてここに偉そうな

評論を試みようとするわけではない。私はただこの二週間ほどの間、「ゲーテとの対話」の中の主人公ゲーテが、あの疾風怒濤の時代に翻弄されることもなく、恋愛と詩才と学才、且つは貴族社会の常識に身を任すようにして生きた姿を、宣長の身の上に重ねて思索してみたかったのだ。

宣長（1730～1801）もゲーテとは東西を隔てておおよそ同時代を生きた人だった。彼は江戸時代という体制教学ともいふべき儒教世界には目もくれず、我が国皇統の神々への信仰心には熱狂的なものがあつたとされる。その精神は後の平田篤胤らに引き継がれ、畢竟するに国家神道の名の下に危険なナショナリズムとファシズムの一翼を担いながら、明治期の廃仏毀釈を経て、昭和の敗戦を迎えるに至る、というのが戦後ながく解き明かされてきた通説であつた。

小林秀雄が「本居宣長」の中で、重ねがさね説ききたる市井の常識人、家庭人として封建社会の

規範に寄り添うように生きた宣長の姿は、そうした神道の祖師として崇め奉ろうとする宣長論への、いぶし銀のような反論のぶちまけのように私には思える。

とまれ、この二人の天才的文人の間には、天才にとり憑きやすい酩酊の神ディオニュソスが彼らを敬遠し、凡俗の輩が渴仰する太陽神アポロが(我が国では皇祖神アマテラスオオミカミだった)この天才たちをこよなく愛した、という点で私はそこに二人の間の想定外な符号を発見した思いを致したのであった。

他愛ないといえはたわいないのだろうが、私のあの二週間ほどの思索に見だした二人の巨人たちの間の符号が、あの朝私たち夫婦の間に桜の花を介して起こった、もう一つ奇妙な符号の引き金となったのではないか。だとすれば、これはまさに二階建ての奇妙な符号といえなくもないのである。

[illegible]

「みちのく探訪」の旅
 ～～春爛漫に美酒爛漫の地を訪ねる～～

高木亨一

1972年、当時の東京プラント部で元気一杯、東芝案件を成功裏にfollow upしていた頃、京野勉君が中東より帰国し、プラント部に入ってきた。

彼とは、同期同窓（慶大36卒）の仲であった。
今回の旅先は彼の住むみちのく湯沢方面であった。

5月15日09:00山岸正雄さん企画の“みちのく探訪”の旅に参加する為東京駅の東北/山形新幹線。ホームに集まった4人は09:24発山形新幹線つばさ131号に乗り込むや缶ビールによる宴会を始めた。新庄までの3時間11分、立古健策、牧洋生。山岸正雄の3人は飲み続けていた。

新庄駅で下車、奥羽本線に乗り換え湯沢まで1時間10分の旅。2両編成で単線の第三セクターかと思っていたらJR奥羽本線だと聞いて二度びっくり。

湯沢で待っている美酒爛漫の社長京野勉氏は、ニチメン時代、同期同窓で短期間だが、同じ部課に所属強く印象つけられた一人でした。

京野社長はニチメンに昭和36年入社、大阪の織

維から中東に駐在、東京の施設プラント部に転入、私がPoland Warsawに赴任にするまでの数日間引継ぎのため朝から夜遅くまで一緒に彼の人生観を聞かされていた。

特にととうと、ゆっくりとした語り口は説得力があった。同期同窓であった事が二人の為口による忌憚のない会話が弾んだ。今でも記憶に新しいのは「睡眠時間と出勤時間の議論」です。

人間は最低一日8時間の睡眠はとる必要がある、従い夜の付き合いは早めに失礼する、8時間寝るのが絶対条件の京野に対し私当時平均3時間半～4時間弱でしんどいけど、如何に帰りが遅くとも9時前には出社着席しているのが社員の義務だと言うよりも私の『サラリーマン訓』の一つとして最後まで実行した。

「睡眠時間は君の健康の為だ」、京野に言われたのは40年前の事でそれ以来の再会であった。

湯沢の駅では京野と思しき白髪 of 紳士が迎えてくれた。



黒々とした髪に顔中が髭の京野も毎日8時間寝てるうちに白髪に。久し振りの再会の挨拶が「お前も老けたな」だった。

一行は90年の歴史を誇る日本古来の酒つくりの伝統を忠実に受け継ぎ美酒爛漫の名前を今も揺



左から、立古さん、牧さん、山岸さん、高木

るぎないものとしている、工場の設備と職人の皆さんにお会いできるのを楽しみに二階から三階へと上った、迎えて頂いた現場の方は予想通り物腰が柔らかで誇りと自信に満ちた匠の雰囲気であった。



酒蔵御嶽蔵（みたけぐら）の商談室に案内され、各種美酒爛漫の試飲に一同興奮。

各自数本の大吟醸酒を購入。此れより今宵の宿、子安峡温泉の旅館「元湯くらぶ」に京野社長お呼びして小宴をと、山岸さんよりお尋ねしたら、都合悪いとの事で、代りに藤原里美さんを紹介受けた。30代の広報担当で最近湯沢の酒造組合から転職してきた由。

旅館での夕食会は、京野社長の代理、藤原嬢の出席で、われら四爺は多少、緊張気味で始まった。

やがて、その場に、カラオケセットが持ち込まれ、一同、日頃のストレス解消とばかりに歌の競演となった。

翌朝、旅館手配のミニバスで、主たる名所巡りをして、「稲庭うどん」佐藤養助本店に立ち寄り、本家の稲庭うどんを食べた。細めを冷やしセイロで食べるのが“通”だそう。

旅館を出てから京野社長と会うべく電話したが、社長は10:00出社



美酒爛漫 普通酒 1.8L 200ml 標準小売価格 200円(税込) / 美酒バック 1.8L 標準小売価格 1,613円(税込)
 おかげさまで美酒爛漫は、「全国新酒鑑評会」において前年に続き2年連続金賞を受賞しました。
 秋田銘醸株式会社 お問い合わせ ☎ 0120-73-5544 オンラインショッピングもご利用いただけます。
 お酒は二十歳になってから

と聞き時間がなく、再会を期して、結局、14:10
奥羽本線に乗り、帰路に着いた。

山形新幹線の車中では又、缶ビールの酒宴が始まった。

一行の中での最長老、立古健策さんは、80うん才にして、お元気、明朗闊達、能弁にして博識だし、人生を従容として生きている様は素晴らしい。

お蔭で、楽しい旅を味わえました。

その立古さんがカバンから一枚の写真を取り出して、未だに町内会役員として活躍し、子供達と友達になって、ついでお母様方ともお友達になって余生を楽しんでいる由。

今回の度の企画立案の山岸正雄さんはプラントの先輩で、大変お世話になりました。

さらに同行の牧洋生兄、私の慶応の先輩で、これまた立古さんに負けない能弁の士にして酒豪、楽しい旅に成りました。“旅は道連れ”とはよく言ったもの。



立古さんと子供達

[illegible]

加藤信一郎さんの思い出

一 準 井 辻



庭に、一匹の蝶を、みました。“ああ、加藤さんが来たな、” そう感じました。茶色の羽に、少し黒い紋、昔一度、送ってもらった、ツマグロヒヨウモンによく似た蝶でした。

丁度、此の追悼文を、頼まれた日でした。

加藤さん、もう、逝かれたんですね。

私の、33年のニチメン人生で、いつも、何かの、大切な転機に、現れた先輩でした。

そして、その都度、的を得た、冷静な判断、指針を、与えて頂いたと今思い返しています。

加藤さんの、配下に、所属したのは、昭和32年

だったと記憶します。物資部で、ミシンと、電機の 新輸出製品が、大きく、のびたときでしたね、

調子に乗った、三人の悪餓鬼社員でした。お墨付きで、監視付きの 鈴木喜一郎、勝又吉久、其れに、私でした。

当時、加藤さんは、大阪機械部の中枢、繊維機械部の聡師でした。そんな ヤンチャを、Nominication を通じて、大きな理解と、包容力で包み、育てて、のちの、誇りである 電子、電機部に、育て上げた人です。

超多忙の電機部に、あるとき、小生に Venezuela 駐在の社命が、おりました。とても、この多忙な部門を、離れることできないとおもって、福井社長に、御断りのご返事を、と、DOORの前まで、着たとき、追いかけてきた加藤さんが、厳しい目で、“その社命を断るな”と、私を抑えました。これが、第一番の、転機でした。

二番目の転機は、産業機械に配属されて、YANMAR Businessの担当になったときです。当時、YANMARは大変大切な取引先で、それだけ、うるさい相手でした。

憂鬱な私に、勇気を、与えてくれたのも、加藤さんでした。そして、その最盛期、Chicago支店長へ、転勤を、命じられました。その時は、加藤さんは、管理部門の、幹部でおられていましたが、すぐに、加藤さんを、尋ねて、ご意見を、伺いました。もう部下でない私にも、暖かいご指導を、頂き、積極的な前進を、勧められました。

常に、冷静、怜悯な判断の人でした。上役と、正義を論争する、強い気迫がありました。

そんなまじめな、実直な加藤さんにも、災害が、訪れて、あの阪神大震災で、お宅はもとより、大切な奥様までも、大きな怪我を、受けられました。

埼玉に引っ越されたことで、お会いすることも、少なくなりましたが、加藤さんの、ご趣味と言えば、誰もが、知っている 蝶々のCollectionでした。加藤さんの、本髄、打ち込んだら、とことんやりとおすという、あの方の根性でしたね、そのため、遠い南方の国々、名も知らぬ島々、20数か所の、それも、奥深いJungle、の中まで、時には、ご子息も、つれて、探検されました。2006、十月に、地元 埼玉昆虫談話会で、“寄せ蛾記”という小冊子を発行されて、“蝶への思い、今もなお”という一文を、書いておられます。

激しい商社マンの傍ら、“美”を追う心の、優しさを、もった方でした。

もう一つ、船井電機との商内から、沖縄 との御縁をつづけられ、蝶の収集も手伝って、加藤さんの、沖縄好きは、病 膏肓でしたね。あの音痴の、加藤さんが、沖縄の歌だけは、歌ったのですからね、一夜、宝塚沿線の、どこかの、沖縄居酒屋につれられて、蛇味線に合わせて、合掌したことを、思い出します。 なにも、かも、懐かしい思い出です。

奥様が、コーラスに熱心で、我々夫妻も、音楽好きなどから、家族ぐるみのお付き合いでした、清荒神 におられたときも、埼玉に移られてからも、ご夫婦、揃って、其々の、ご趣味を生かし、すぐ、地元の、文化に、同化される、文化人御夫婦でも有りました。

人は、皆、見かけによらずという

面がありますね、あの、いつも静かな、加藤さんのどこに、そんな情熱があったのか、反面、とても、親しみを感じられる加藤さんに、厳しく世の動きを、判断され、行動される、冷厳さがあって、そこに、加藤さんの、その深さを、今感じます。

その、懐かしい加藤さんとも、今は、幽明境にすることする 次第となり、感慨無量です。

奥様も、御子息お家族とともに、お力落しのないよう、ご主人との、長い人生の貴重な思い出をたどられて、新しい希望に向かって、御進みください。心より、お冥福を祈ります。

採集に赴いた主な南海の島々

日本：

奄美大島、沖縄本島、渡嘉敷島、石垣島、竹富島、波照間島、与那国島、西表島

フィリピン：

ルソン島、パラワン島

インドネシア：

ジャワ島、アンボン島、セラム島、小カイ島

ひと 彩々



東埼玉

2005年10月20日
朝日新聞 第2埼玉版
に掲載された
故加藤さんの記事

チョウへの思い 今なお

83歳。足腰は弱った。しかし、70年以上も追いかけてきた恋人への思いは消えない。居間には、手の届くところに虫取り網。松伏町の加藤信一郎さん（写真）は、町に生息するチョウとガを知り尽くしている。神戸市生まれ。小学2、3年生のころ、自宅近くの歯科医院にチョウの標本がいっぱいあった。歯科医はいろいろな教えた。それから、それから息するチョウとガを知り尽くしている。6甲山あたりを駆けめぐった。神戸市生まれ。小学2、3年生のころ、自宅近くの歯科医院にチョウの標本がいっぱいあった。歯科医はいろいろな教えた。それから、それから息するチョウとガを知り尽くしている。6甲山あたりを駆けめぐった。神戸市生まれ。小学2、3年生のころ、自宅近くの歯科医院にチョウの標本がいっぱいあった。歯科医はいろいろな教えた。それから、それから息するチョウとガを知り尽くしている。6甲山あたりを駆けめぐった。

★★★HP 立ち上げ当初を振り返って…★★★

HP班リーダー 栗 田 久 彌

現在のニチメン東京社友会のHPは、「HPを最低限の費用で自主作成しよう」と僅か2～3人の世話人の中での正に「瓢箪から駒」的なヒョんな会話の中から生まれましたが、極一部の当時の関係者を除けば、その様な経緯はご存知のない事と思います。

「へー、そんな経緯から今のHPがあるのか・・・」と多少でもその生い立ちを知って頂ければ幸いと思いながら、この拙文を寄せる事に致しました。

皆さんご存知の通り、双日は2006（H18）年港区芝の三田NNビルから同区赤坂の国際新赤坂ビルに移転しましたが、その際にニチメン東京社友会は日商岩井社友会と共に東館17階の隣り合った可也広い部屋を一室ずつ与えられました。

正確な日付は失念しましたが、確か春頃と記憶しますが、「ニチメン東京社友会」立ち上げの為の何回目かの準備会の打ち合わせ終了後、西館から東館の現場に双日社員の方の案内で下見に行きました。

既に隣室には日商岩井社友会が入室して居たので挨拶に行ったのですが、その際に会員向けHPを運営している事を知り、我々もHPを立ち上げる必要性を感じながら部屋に戻り他の世話人と立ち話をしている時に、双日のHP関連の仕事をされて居られる方が来られHPに関する説明を色々して呉れましたので、HP立ち上げ時や立ち上げ後の月々の経費にどの位の金額が掛かるのか？一寸気になったのでお聞きした処、記憶が多少曖昧で必ずしも正確な数字では有りませんが、「凡その処、初期立ち上げ時はデザイン・内容の難易・多寡等にも依るが少なくとも数十万円～百万円超、月々の費用は記事追加・保守作業等で数万円～十数万円程度は必要でしょう」と言った説明を聞かされ、「HPの立ち上げ・運用は意外と費用が掛かるものだな・・・」とのどちらかと言えば強い印象を受けた記憶が今でも鮮明に残っています。

ニチメンの経営が極度に悪化し今迄全面的な援助のもとで運営されて来た「長月会」が完全解散して約2年、紆余曲折の末 如水会館での第一回総会が開かれ会員の自主運営に基づく「ニチメン東京社友会」が発足した7月13日の2ヶ月程前の話です。

これからOB会そのものの母体を作ろうとしている時期で、勿論資金的な裏付けも全く無いけれどHPを立ち上げて会員との交流の場にしたいとの思いが先行、色々思案する日が続きましたが、「それなら『自分達丈での手作りHP』を作ろう」と先の見通しも見えない俣、極々初歩的な事から調査・研究を始めました。

その後、運良く入社同期で柏市在住の田村陽一さんがご自分でHPを作られ公開して居る事を知り、早速彼にお願いして、「HPってどんな作り方をするのか？」と言う全くの一からの勉強を週一回位のペースで、HPチームからの三人（倉持世話人、本間登志雄＜一般会員＞、栗田）と密接な連携が求められる会報チームから長谷川、高木 両世話人の参加をお願いし、先生一人生徒五名での勉強会をスタートさせました。

先生から最初に与えられた教材は、HP関係雑誌に掲載されていたその時点での代表的なHP作成ソフトの一つであるIBM社製最新版を使つての26頁に及ぶ特集記事「ホームページ・ビルダー Ver. . 6で作ってみよう」と言うものでした。

初打ち合わせ時に渡されたこの教材は勿論日本語で書かれて居るものですが、いざパソコンで作製練習の段階に入ってみると、WORDでの文章作成やEXCELでの表作成程度しかやった事の無い我々にとっては、HTML言語などと言う訳の判らない言語で作製して行く命令文の作製作業は全くの初体験で、こんな一見

簡単に短い命令文でチャントしたHP画面が出てくるのか？と一抹の不安感を持ちながらも言われる俣の命令文を作製し、モニター画面に出してみると「アー不思議！」、先生のご説明通りの画面が現れ、手を叩いて喜んだものでした。

一方、どの様なコンセプトでトップ画面や其れに続く各項目の画面を作るかのグランドデザインに就いての議論は、一筋縄で済む様な代物ではなく、寧ろ多大な時間を費やす事になりました。

あーでもない、こーでもない又何回となく意見を出し合い討議を重ね最終的に、トップ画面のデザインは、上段にニチメン東京社友会のロゴと住所、その下に多くの会員が慣れ親しんだ本社宝町ビルと日本橋ビルの写真、右側に会員の動静やニチメン社友会に関する諸項目の目次をあしらい、中・下段にトピックス、お知らせ、双日HPへのリンク等を配置する事でスタートする事になりました。

中段のトピックスの記事は、河西郁夫初代会長の社友会発足挨拶、双日石原常務の来賓ご挨拶、長老を代表しての濱田雄三さんの総会挨拶などを掲載、次いで世話人会からのメッセージとして倉又世話人代表の「縁の下の力持ち11人衆」と題する一文を記載する事にしました。

「会員の動向」に就いては、各OB会、同好会の幹事さんに寄稿をお願いしました。

又、OB会の重要情報の一つである会員の動静、就中計報と物故者名簿の作成・維持作業はHP班がその一翼を担う事になりました。（乞 挿入写真ご参照）

その後頻繁に東館17階のニチメン東京社友会室に向き、HTML言語による新規記事の作製・掲載、画面修正等の作業を、少しずつ勉強しながら行いました。



そんなこんなで、最終的に12月24日の夕刻ヤットコサでHPのアップロードに成功し、何とか初志を貫く事が出来ました。アップロード後メンバー一同「とうとうやった！」と言った感激に浸った後の退室でしたが、帰路途中の駅々・周辺商店街等から流れてくるジングルベルの音が一層軽やかに聞こえて来たのは一人私のみでは無い様な感じを持っての帰宅でした。

5月頃から始めたズブの素人によるHPの立ち上げでしたが、何とか半年掛かりではありますが目的を果たせた事は本当に良かったと一種の安堵と達成感を得た思いでした。因みに、その後この間に費やした費用を集計して見ましたが、総額約7万円でその主たるものはメンバーの交通費でした。

その後の2008年11月17日、当時事務局担当だった沖本達也元世話人の紹介で、ニチメン鉄鋼の出身でIT関連の会社「アクロスウェイ(株)」を立ち上げ活躍されている小蒲智臣社長と同業務部 岸本美由紀社員のお二人とOB室で面談、HP運営の側面的援助を低料金で受けて頂ける事をお受け頂き、専門的なアドバイスと画面作成作業の具体的な指導による画面の一新と内容の充実に取り組み、現在のHPの形へと進化する事が出来ました。

翻って、昨年度（2011年7月～2012年6月）～本年度3月頃迄の約一年半の間の活動を振り返って見ますと、私自身の私的事情でHP更新作業に注力すべき時間的な余裕が充分取れず、更新作業がやや停滞、計らずも皆様にご迷惑をお掛ける結果になって仕舞いましたが、幸いそれら事情も現時点では略解消、これからより積極的に内容の充実に励む事が可能になりました。悪しからずご容認下さい。

【編集後記】

年2回発行の「会報」も今号で、No.14を数える。遙けくも来たものだ。
米大統領の任期で言えば、もう二期目の最終年である。

何のかんばせあって社友会世話人になったのかは、さて措いて、老骨に鞭打っての編集業務はシンドクもあるが、出来上がったときの達成感は快い。

毎回、碩学のレギュラー寄稿者に支えられて、紙面を構成しています。
悠々自適の生活、日々是好日をエンジョイしている人々も居られる一方、病と闘っている多くの社友も居られるので、昔の元気な頃を思い出し、旧歡を暖め、すこしでも encourage出来たらと思いつつ小紙を作っています。

このところ吾が安部内閣総理大臣は、世界を舞台に、トップセールズと称して東奔西走している。
インドのマン・モハン・シン首相との会談では、インドの鉄道等インフラ整備にODA 供与を約している。
安部総理はご存知だろうか？ 吾がニチメンは、1960年代初頭に、早くもインド国鉄の電化工事を旧国鉄の技術陣共々請け負って完遂したことを。

その頃の工事拠点の日綿Calcutta店は、古谷野役士支店長、宇津木さん、柳田望さん、木村正樹さん、そして先月亡くなられた矢吹敦司さん、全員が泉下の客となられた。
茲に特記して改めて御冥福を祈ります。
そのインドについて、高尾勝さんより再び「インド雑感ー3」を、寄稿して頂いた。

ニチメン・ラングーン支店（現ヤンゴン）も懐かしい。
ビルマと言えば 尊敬すべき森田丹さん、千田忠美さんのお名前が想起されます。
時移り、体制の変遷を経て、今はミャンマーと呼ぶ国。アウンサン・スー・チー の来日もあって時代は移り変わった。
軍政下の厳しい時代のミャンマーに駐在した丸野純さんがミャンマー駐在記を寄せてくれました。
ご高覧下さい。

（ 長谷川 洋 ）

ニチメン東京社友会

〒100-8691 東京都千代田区幸町2-1-1
飯野ビルディング17F

発行人	；倉又 則夫	代表世話人
編集責任者	；長谷川 洋	世話人
アドバイザー・スタッフ	；高木 亨一	世話人
	倉持 次雄	世話人
	園山 春一	世話人
印刷所	；(有) 関 内	印刷